


R. REF.	A. REF.	
		

平成15年度

# 青年招へい事業

実績概要／交流レポート

JICA LIBRARY



1214716 [1]

平成16年 8 月

独立行政法人 国際協力機構

平成15年度  
青年招へい事業

実績概要／交流レポート

平成16年8月

独立行政法人 国際協力機構



1214716 [1]

## はじめに

青年招へい事業は、開発途上国の若手人材を育成するとともに、相互理解と信頼を深めることを目的に、全国の数多くの団体及び市民の方々に支えられながら実施されています。

その招へい国と人数は、1984年にアセアン6カ国を対象に開始した当時から拡大し、平成15年度までに125カ国以上から約2万7千人を受け入れるに至っています。これは関係各方面の皆様のご協力と温かいご支援の賜であり、心よりお礼申し上げます。

本報告書は、平成15年度分の招へい実績の概要に併せ、招へい青年、合宿セミナー参加日本青年及びホームステイを引き受けていただいた家庭の皆様から寄せられた感想文等をまとめたものです。これら感想文には、新しい体験やこれまで気付かなかったことへの発見による意識の変化や感動、また他への理解と愛着などが溢れ出ています。国際化社会の中で、これらひとつひとつの種が各地で希望の芽を出し、相互理解と発展という実を結んでいくことと信じております。

また、平成15年度には青年招へい事業20周年記念事業として、エッセイ&写真コンテストや記念式典、海外交流プログラムなどを実施しました。コンテストにも記念式典にも、多数の方々に参加いただき、あらためて当事業の成果を確認することができました。なお、記念事業実施の際は、多数の関係者の方々のご協力を得て、盛況うちに終えることができました。この場を借りてあらためてお礼申し上げます。

最後となりましたが、本プログラムの実施に際し、ご協力いただいた皆様ならびに関係者の方々に重ねてお礼申し上げますとともに、青年招へい事業が更に有意義なプログラムとなりますよう、今後ともご支援、ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

平成16年8月

独立行政法人 国際協力機構  
国内事業部  
部長 湊 芳郎

## 開講式



JICA挨拶



青年の様子

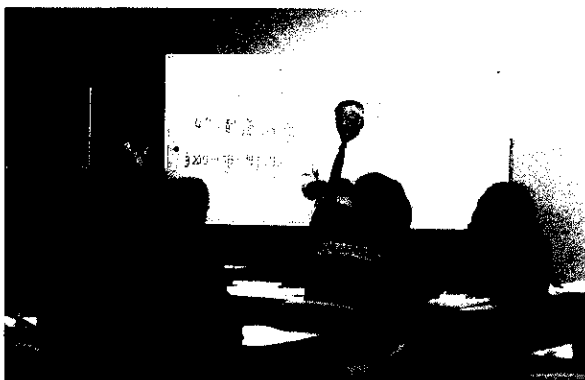
## 共通プログラム



日本語学習



ワン・デイ・ボランティア



日本理解基礎講座

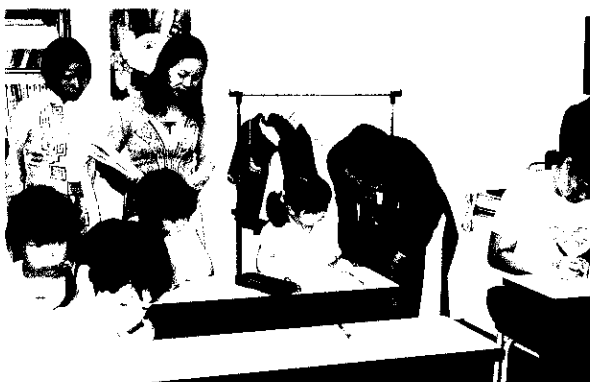
## 分野別都内プログラム



専門分野の講義



専門分野の視察



専門分野の視察

## 合宿セミナー



グループディスカッション



スポーツ交流



交流の夕べ

## 分野別地方プログラム



学校訪問



日本文化体験



さよならパーティ

## ホームステイ



団らんのひととき



夕食作り



ホストファミリー宅前にて

## 閉講式・歓送会



修了証授与



歓送会の様子



# 目 次

はじめに

I. 青年招へい事業について	1
1. 事業の目的	1
2. プログラム構成及び実施体制	1
3. 招へい対象者	2
II. 平成15年度青年招へい事業の実績	3
1. 平成15年度青年招へい事業の概要	3
2. 青年招へい20周年記念事業	3
3. アフターケア事業	4
(1) アセアン婦国青年同窓会交流連絡会（AJAFA-21）特別会合の開催	4
(2) 事後交流促進調査団の派遣	5
III. 交流レポート	6
1. 招へい青年の印象	6
<b>アジア</b>	
中華人民共和国	6
カンボジア	10
インドネシア	11
ラオス	14
マレーシア	15
アフガニスタン	17
ミャンマー	18
フィリピン	19
タイ	21
ベトナム	24
東ティモール	26
バングラデシュ	26
インド	28
ブータン	29
ネパール	29
パキスタン	29
スリランカ	30
モンゴル	31
ウズベキスタン	31
タジキスタン	32
アルメニア	32
キルギス	33
<b>グルジア</b>	33
<b>カザフスタン</b>	34
<b>大洋州</b>	
ツバル	34
トンガ	35
ミクロネシア	35
パプアニューギニア	36
<b>アフリカ</b>	
カメルーン	37
ガボン	37
南アフリカ	37
ケニア	38
ウガンダ	38
ニジェール	39
<b>中南米</b>	
チリ	39
トリニダード・トバゴ	40
<b>中近東</b>	
サウジアラビア	41

2. 合宿セミナー参加日本青年の声 .....	42
3. ホストファミリーの思い出 .....	47
4. 実施協力団体の所感 .....	50

<資 料>

図表. 平成15年度青年招へい事業 受入実績グラフ .....	59
表1. 青年招へい事業 国・地域別／年度別受入実績 .....	60
表2. 平成15年度青年招へい事業 招へい陣別受入実績 .....	61
表3. 平成15年度青年招へい事業 国・地域別受入実績 .....	62
表4. 平成15年度青年招へい事業 地域別・国別・分野別受入実績 .....	65
表5. 平成15年度青年招へい事業 JICA国内機関／都道府県別受入人数 .....	66
表6. 平成15年度青年招へい事業 調査団派遣実績 .....	67
別添1. 青年招へい20周年記念式典報告 .....	68
別添2. 青年招へい事業 帰国青年同窓会活動概要（平成15年度） .....	71
別添3. 平成15年度事後交流促進調査団派遣報告（要旨） .....	72

# I. 青年招へい事業について

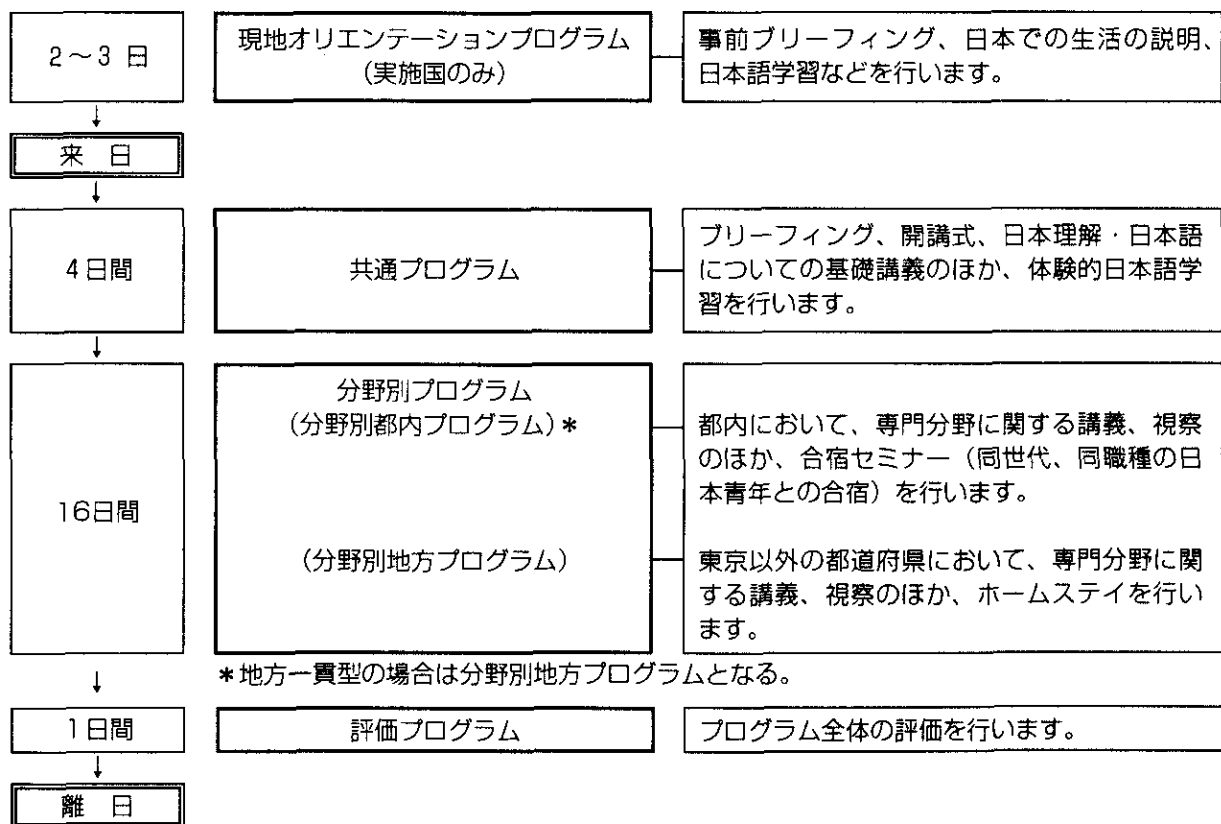
## 1. 事業の目的

青年招へい事業は独立行政法人国際協力機構（JICA）が開発途上国を対象に実施する政府開発援助（ODA）事業の一環として、これら諸国の未来の国造りを担う青年を専門分野別に23日間我が国に招へいし、それぞれの分野について学ぶとともに、これらの参加青年が日本人との交流を通じ相互理解を深め真の友情と信頼を培うことを目的としています。

## 2. プログラム構成及び実施体制

各プログラムは原則として来日日・帰国日を含め23日間で実施されます。また、国により来日前数日間の現地オリエンテーションプログラムを実施します。基本構成は下図のとおりです。

分野別プログラムについては年間計画で決定した各実施協力団体に実施を委託しています。



### 3. 招へい対象者

参加資格要件として以下の事項を設定しています。

- ① 各分野別グループごとに設定する対象職業に従事していること。
- ② 18歳以上35歳以下であること。
- ③ 所定の言語に堪能であること。
- ④ 心身共に健康であること（移動が多いため、身体にかかる負担を考慮し、妊婦は対象外）。
- ⑤ 軍籍にないこと。
- ⑥ 来日経験がないこと。

## Ⅱ．平成15年度青年招へい事業の実績

### 1．平成15年度青年招へい事業の概要

平成15年度はアジア、大洋州、中南米、アフリカ及び中近東地域計109カ国より1,625名の青年を招へいしました（国・地域・分野別の招へい計画及び実績については資料の表2．参照）。

招へい青年は、共通プログラム、都内分野別プログラム（一部プログラムを除く）及び44道府県に分かれての地方分野別プログラムを通じて、専門分野に関する知見を広げるとともに日本と日本人への理解を深め、その成果とともに帰国しました。

また、相互理解を促進する機会であるホームステイ、合宿セミナー、ワンデイ・ボランティアでは延べ1,498家庭と3,018人のボランティアの方々に参加いただき、地域国際化の輪を広げました。各地での学校訪問では、招へい青年が日本の人材育成の基礎となる教育の現場を体験するとともに、国際理解教育の一助ともなり相乗効果をもたらしています。

### 2．青年招へい20周年記念事業

青年招へい事業は、1984年アセアン諸国を対象に「21世紀のための友情計画」として開始され、この20年間に受け入れた青年数は120カ国26,000人を超えました。インドネシアでは帰国青年出身の国会議員が多数輩出されているなど、各国で帰国青年が中心的役割を担う人材として育っており、本事業は人材育成面に多大な貢献をしています。また、アセアン各国では、強い連帯感を持つ帰国青年の同窓会が設立されており、各国内での社会貢献活動や同窓会同士のネットワーク構築がなされるとともに、本邦

#### 戦後復興に取り組むアフガニスタンからの初の招へい

平成14年1月に東京で開催されたアフガニスタン復興支援会議と、同年5月に川口外務大臣が発表した「平和の定着構想」（和平プロセス、治安及び人道・復興の三本柱を支援）の下、日本政府はアフガニスタンに対し積極的に復興支援を行っています。この一環としてJICAでは技術研修員を受け入れてきましたが、アフガニスタンの青年層の人材育成及び同国と日本の二国間の相互理解を目的として、平成15年度には同国から初めて青年を招へいすることとなりました。

平成16年1月に、戦後復興に取り組む公務員15名と人材育成に携わる教員20名の計35名が来日。東京及び沖縄・広島で戦後復興と教育に焦点を当てたプログラムが実施されました。

都内プログラムでは国の政策等について学ぶとともに訪問先の大学や合宿セミナー等において活発に意見

交換が行われました。戦後復興のプロセスを実際に体験した沖縄及び広島では、地域振興のみならず、教育・自然保護・観光なども視野に入れたプログラム内容で視察・研修が行われました。沖縄・広島ともに、戦争の傷跡をしのぐ現在の発展ぶりに青年たちは驚嘆の声をあげ、ここまで発展した理由について講師の方々に熱心に質問していました。

「日本で見て学んだことを自国の復興に活かしたい」という青年の熱心な姿勢は受入側及び日本人参加者にも強いインパクトを与え、アフガニスタンという国への理解を深め、平和の大切さをあらためて認識した日本人参加者も多かったようです。

今回参加した青年達は、それぞれの地域・分野のリーダーとして活躍し、アフガニスタンの復興・発展に貢献していくことが今後期待されています。

地方と独自の交流を継続しています。一方日本国内では、合宿セミナーやホームステイ、学校訪問等で本事業に関わった市民の数は20万人を超え、本事業をきっかけとして、地域国際化の推進や受入団体による帰国青年出身国に対する国際協力活動などが行われており、本事業は国内外に大きなインパクトを与えています。

そこで、JICAでは平成15年度に事業の20周年を迎えることを記念し、以下の3つのイベントを行いました。

(1) エッセイ&フォトコンテスト（平成15年8月～平成16年1月）

青年招へい事業に参加したアセアンの帰国青年、及び、青年の受入れに関わった日本人を対象として、青年招へいに関するエッセイ及び写真を募集しました。

(2) 20周年記念式典及びプログラム（平成16年2月）

平成16年2月27日及び28日に、「青年招へいの未来へむけて」をテーマとして、JICAと「青年招へい事業」活動協力協議会（CAC-21）の共催で、国際協力総合研修所にて「青年招へい20周年記念式典」がとり行われました（詳細内容は資料の別添1.を参照）。これは、青年招へい事業の成果・効果を確認するとともに、事業成果の効果的な広報を行い、国内参加者のネットワーク、帰国青年同窓会と国内参加者（市民及び団体）のネットワーク構築に貢献することを目的としたものです。

式典は、緒方理事長の挨拶から始まり、エッセイ&フォトコンテストの各国最優秀者への授賞式、アセアン各国同窓会の活動報告、青年招へい事業の今後を語るシンポジウムなどが行われました。その他三味線・日舞・和太鼓の演奏など、日本文化の紹介も行われました。

2日間を通じての参加者は、アセアン各国同窓会代表者や、コンテスト受賞者、ホストファミリー、ボランティア参加者を含め、総勢274名にのぼり、式典は盛況のうちに幕を閉じました。

式典後、エッセイ&フォトコンテストのアセアン各国受賞者9名は大阪への地方旅行に参加し、ホームステイや観光を楽しんで帰国しました。

(3) 在外交流プログラム（平成16年3月）

エッセイ&フォトコンテストの日本人受賞者は、在外交流プログラムとして、JICA主催の中学生・高校生エッセイコンテストの受賞者とともに、ベトナムへ1週間派遣され、異文化体験をしました。

### 3. アフターケア事業

(1) アセアン帰国青年同窓会交流連絡会（AJAFA-21）特別会合の開催

青年招へい20周年記念式典の実施時期とあわせ、平成16年2月29日に国際協力総合研修所にて、例年実施しているアセアン帰国青年同窓会交流連絡会（AJAFA-21）の特別会合が開催されました。式典参加者のアセアン9カ国の同窓会代表者（ブルネイ除く）が参加、JICA及びCAC-21はオブザーバーとして出席しました（各国同窓会の概要は資料の別添2.を参照）。

通常の会合と異なり、短時間で議題を絞った会議となりましたが、確認された事項は次のようなものです。

- ・AJAFA-21の主要活動のひとつであったユースキャンプ（アセアン各国及び日本から青年を1カ所に集め、ミーティングと交流を行うもの）は、諸般の事情で数年間実施されていなかったが、2004年度はインドネシアにて実施する方向で企画する。

- ・2004年度のAJAFA-21総会はベトナムで開催する。
- ・JICA本部とJICA各国事務所、そして各国同窓会の連絡を密にし、連絡事項の遅滞や漏れがないようにする。

## (2) 事後交流促進調査団の派遣

青年招へい事業においては、招へいを糸口とした国際交流・協力活動が大きな成果のひとつと位置付けられており、また今後さらに国際協力における国民参加の拡大が期待されています。このような背景の下、従来のアフターケア調査の趣旨を拡大し、各団体等の継続的な事後活動（国際交流、国際協力）を推進することを目的に、平成14年度から事後交流促進調査団を派遣しています。本調査団は、青年招へい事業受入れを契機に招へい国との継続的な交流・協力事業を実施したいという受入団体や地域の趣旨に当機構が賛同し、その経費の一部を負担するものです。

平成15年度は、東ティモールとタイの2件が採択され、各国で今後具体的な交流・協力を実現していくための調査が実施され、帰国青年等との交流が深められました（各調査団報告要旨は資料の別添3. 参照）。

今後も様々な地域で事後交流・協力案件が拡大していくことが期待されています。

## Ⅲ. 交流レポート

### 1. 招へい青年の印象

#### ◆アジア／中華人民共和国

#### 勤勉で行動的な、中国人に優しい教養のあるご老人

羅 旭輝

(青年指導者グループ)

私のホストファミリー尾崎孝介さんは高校しか出ておらず、また63歳という高齢ではあるが、毎日中国語と英語を勉強している。尾崎さんの名刺には「水を飲むときはその源を思う」、「年はとっても気は若い」という中国の古い諺が印刷されていた。尾崎さんは私たちのために登山、老人ホーム見学、更に鳥取短期大学訪問など、さまざまなスケジュールを組んでくださった。そしてそれは、どれもきめ細かく行き届いていた。尾崎家では、これまで数十名の中国人を受け入れており、十数冊のサイン帳は中国人のメッセージでいっぱいだった。尾崎さんは非常に朗らかで、いつも笑顔を絶やさなかった。

彼は日本の庶民そのものを体現している。皆勤勉で、行動的、自分を律し、中国人民への友情に満ちあふれ、中日平和友好事業の発展に黙々と尽くしている。それは多くの日本の青年に受け継がれていくのだ。尾崎さんらは日本の現代文明社会の基礎を打ち立てたのだ。そして中国青年に美しい思い出を残してくださった。

#### 日本の印象

楊 潔

(経済グループ)

23日間の研修生活は私が生涯初めて、身近に日本に接するものであった。

日本は歴史の文明と現代の息吹が見事に溶け合った国柄である。至るところで空気がきれいで清潔感がある。日本の都市の特徴には大きな違いがある。大阪は純朴で飾らない。東京は賑やかであり、富山には豊かさがあり、京都は古風である。人間重視の企画理念と、深く人々の意識に浸透した環境意識が日本人の生活を快適、簡便かつ健康なものにしている。

日本の企業は世界でも一流といえ、我々が訪問した日産、YKK、松下などの有名企業はどこも従業員の勤勉さと会社への誇りが溢れており、深い印象を与えてくれた。

日本人は情に厚く用意周到である。わずかなホームステイの期間でも、私がお世話になった家庭ではおいしいものを用意してくれたり、いろんな観光地に連れて行ってくれたりして、手を尽くして私のために日本航空富山空港支店の見学をアレンジしてくれた。私にとっては日本の同業者と交流し、研鑽する良い機会となった。

日本青年は積極的で向上心に富み、民族の誇りを強く持っていらっしゃる。いろんな階層の青年との



交流を通して、我々は互いに友好と理解を深めることができた。日中両国は一衣帯水の隣国であり、代々の友好は両国人民の永遠かつ共通の願いでもある。

---

## 日本のインターネット普及に思う

席 偉

(中国地域振興グループ)

私が今回の日本訪問で最も深い感銘を受けたのは、民間におけるインターネットの普及レベルが非常に高いということである。ISDN及びADSL技術の応用により通信速度は50K/秒に達し、都市部から農村部まで、子供から老人に至るまでほとんどの人がネット上で手軽にさまざまな情報を楽しむことができる。インターネットの普及により多くの情報や知識が瞬時に広範囲にもたらされ、個人や家庭と社会の距離は大幅に狭まり、人々の視野も一層広がり、思考も多様化してきた。

しかし、インターネットの幅広い普及を目にする一方で、例えば、北海道新聞社ではまだ電子新聞が発行されていない、ホームページにざっと目を通す程度しかインターネットを利用していない人も多いという現状を見て、インターネットに関する研究や活用がまだ不十分なのではないかとも感じた。それには、ネット愛好者個人の好みやホームページ作成上の問題、ネット内容の更なる充実といった課題が含まれている。

中国と日本ではインターネットに関してそれぞれに得意分野があるので、私は今後さらにインターネットを広く深く浸透させていくためには、お互いに長所を取り入れ短所を補い、学び合うことが大切ではないかと考えている。

---

## 大川靖則奈良市長の印象

趙 衛江

(教育グループ)

9月11日、私は視察団のメンバーとして大川靖則市長を表敬した。物腰のやわらかい方で、鑑真や日本の遣隋使・遣唐使などについて話されたが、言葉の端々に中国文化に対する尊敬の念が感じられた。続いて市長は次のように述べられた。「日本にとって中国は父親のような国であります」。すぐには何の反応もなかったのは、居合わせた全ての中国人がこの言葉に強く心を打たれたからだと思う。市長がさらに一言「私の言いたいことをお分かりいただけでしょうか」と言われると、会場には長い長い拍手が鳴り響いた。市長のこの意味深い言葉は今も耳に残っている。

隋唐の時代は我が国古代文明の中で最も輝かしい一時期であり、当時日本は学者を中国に派遣して、あらゆることを手本にし、学び取らせた。そして我が国と似た文化や独自に醸成した文化・伝統を今なお保ち続けている。この新しい世紀に我々一行もまた、まさに世界第二の先進国の優れた面を手本にし、学び取るために日本を訪れた。今回の収穫を国に持ち帰ることは我が国の更なる発展充実に役立つであろう。

ホテルに帰ると、テーブルの上の1枚の印刷された水墨画がふと目に入った。それには大川靖則とサインがしてあった。

---

## 中日青年の交流を盛んにし、友好事業を推し進めよう

翼 名峰

(行政グループ)

日中青年の交流を盛んにし、両国の優秀な青年が相互に相手国の社会、国民の実際の状況をより深く理解できるようにし、一緒に生活したり、仕事をしたりできる機会を作って、国民間の友情を培うことは新しい時代に中日の友好事業を推し進める重要な方法である。

ホームステイ中、言葉は通じなかったけれども、受入家庭の温かいもてなしと細やかな気配りを受けて、心から感謝している。日本人が中国人と同じように生活を大事にし、客を温かくもてなし、良い暮らしをするためにしっかり働いている様子を見た。日本が手に入れた経済的成功はけっしてたやすく手に入ったものではないと感じた。両国の人々はこれからも仲良くしていかなければならない。青年の世代としては必ず中日間の歴史問題を解決しなければならないし、子孫にけっして再び新しい歴史問題を残すようなことがあってはならない。

---

## じっくり見て体験した日本

朱 曉紅

(経済グループ)

国と国との関係の中で最も重要なのは人という要素だ。訪日の行程で最も印象深いのは日本人との親しいふれあいだ。日本人の仕事ぶりは謹厳で、まじめ、しっかりした道德規範と公共意識をもっている。団体精神には敬服する。また同時に、日本人の危機意識と憂患も、日本が資源の乏しい状況の中で経済強国の地位を維持する重要な源泉となっている。

合宿とホームステイは全方位的に日本を知る絶好の機会であり、青年交流計画の最後の総仕上げだ。プログラムが始まる前は皆内心とても不安だったが、終わってみると名残惜しく、深い友情を結び、再会を約した。言葉、風俗習慣および社会制度の違いは心と心の交流と衝突を通じてすっかり消え、相手を理解したいと願う心を開きさえすれば、信頼と友情の花がほころびる。

---

## 日本滞在記

武 朋娜

(社会基盤整備グループ)

日本では大阪、東京、館林を訪問見学した。見学先はもちろん普通の場所でも至る所で“人間本位”という理念と高い環境保護意識を感じた。

また、日本では合理的な資源の再利用に力を入れていた。例えば芝浦污水处理所では、処理された汚水は、駅やビルの水洗トイレ、処理所内の機械の洗浄に使われ、汚泥も植木鉢に変わり喜ばれている。污水处理場には公園やテニス場がつくられ人々憩いを与えている。“土一升金一升”という日本の考えを十分に表している。サントリービール工場ではゴミは分別され資源を100パーセント利用するごみゼロを実現していた。その他日本は、疫病発生時の情報開示システムが完備しており人々に安心を与えている。

---

## 永遠に忘れません

李 穎傑  
(環境グループ)

シーン1：奈良での中日青年合宿セミナーが終了し日本青年が解散しようという際に、中国青年は両側に立って彼らを見送りました。みな別れがたく涙を流す日本青年もいました。

シーン2：徳島でのホームステイプログラム終了の際、フェアウェルパーティーが開かれました。パーティーの後で中国青年とホストファミリーは一人一人握手し別れを惜しみました。中国青年、ホストファミリー、徳島青年海外派遣の会のメンバーともに多くの人が涙を流しました。今回の日本研修は非常に深く印象に残り、とても貴重な人生経験となりました。

上述の2つのシーンを私は生涯忘れません。中日両国民の友情を身をもって深く感じました。中国と日本は昔から深い縁で結ばれています。中日両国の末永い友好を心から願っております。

---

## 手を振るされど別離ではなく

李慧南  
(地域振興グループ)

東京の紅葉が好きだ。この彩り鮮やかな秋の日々は、地域振興グループ24名の中国青年に、ずっしりと山のような収穫を与えてくれた。なかでも忘れがたいのは、23日間という短い時間に、日本の友人との間に結ばれた、深く厚い友情である。日本の発達した社会や科学技術、環境意識、国民の資質の高さなど、他の方法でも知りうる経験にくらべ、他のものでは代えられない人と人との交流は、より貴重な体験だと言える。

茨城県では、中日の青年が枕を並べて眠り、距離のない交流を行った。鳥取県では、中国青年とホストファミリーとが同じ屋根の下で、ともに温泉につかり、ともに食卓を囲んだ。そこには相互理解と交流のみがあり、国境はなかった。古稀に近い伊藤晃さんは、初めて会った時に「勸君更尽一杯酒、西出陽関無故人（君に勧む更に尽くせ一杯の酒、西のかた陽関を出ずれば故人なからん）」（旅立つ旧友を送る唐代の詩）を吟じてくれた。別れの際、紀子さんは2歳になる陽信君を抱いて、目に涙を浮かべながら何度も見送ってくれた。

こうした、心の底からの素直な感情を、永遠の宝にしよう。野山に花の咲き乱れる頃、再び会えることを願いながら、今は別れの手を振る。

---

## 教育栄えれば国も栄える

曹磊  
(教育グループ)

23日間の研修日程の間、幼稚園から大学院に至るまでの各教育レベルの施設視察や合宿セミナーを通じて、日本の教育問題について理解と認識を深めることができた。なかでも印象深かったのは以下の3点である。

- ① 政府が最後まで責任を担っていること。教師の賃金は中央政府と都道府県政府が負担しているので、教師に安定した賃金を保証し、地方による格差が見られない。地方自治体による教育投資も大

大きく、金沢市の教育投資をみても地方財政の10～15%を占め、学校に先進的な教育施設を提供している。

- ② とりわけ幼稚園と小学校段階に見られるが、学生を中心と見なす教育理念が徹底していること。
- ③ ハイレベルな教師陣。厳格な教員資格制度と激しい競争メカニズムが教員のレベルの高さを保証している。教師らのプロ意識には敬服させられる。

---

## 初めての温かい触れ合い

于 潔

(JOCV日本語教師グループ)

初めて日本へ来て、初めて自分の目で富士山を見て、初めて日本の一般家庭を訪問し、初めて日本人と親しく交流できたことは、一生忘れられないものとなるだろう。この23日間、私たちは工場、学校などを訪問し、日本の教育の現状をよく知ることができた。また、高知県でのホームステイは、今回のプログラムの中で一番よかったと思う。日本人との2泊3日の触れ合いは、大きな意義があり、お互いの理解を深めることができた。最も忘れ難いことは、ホームステイの時、高知の人々が私たちに熱い心で、温かくもてなしてくれたことであり、日本の人々の中国の人々に対する友情を十分に感じた。特に、お世話になったホストの立花登貴子さんには心から感謝している。彼女の行動を通じて、自分の職業に対する責任の重大さについて実感するとともに、私自身も立派な日本語教師になって多くの人材を育てようと決心した。

---

## ◆アジア/カンボジア

---

### 青年招へいプログラムで学んだこと—カンボジアの農村開発—

ピセト・チェブ

(農業(農村開発)グループ)

日本の農業は非常に発達しているが、特に農家の人々の教育水準が高いことに驚いた。若者が農業に従事するのを奨励する農業政策が採られており、例えば地方の農家は300万円を12年間無利子で借りられる。その結果農業の学校を卒業した若者が農業を始めることも可能になる。JAが運営する直売所では、農民が作物を安定した価格で販売できる。また農家に必要な情報を供給したり農業普及員を派遣したりという政策が、日本の農業が成功した秘訣であると感じた。

カンボジアは農業に適した国で、国境付近以外は山がなく国のほとんどは平野であるが、内戦が長く続いたために農業技術は非常に原始的で、農作業の大部分は人力で行われている。農民の教育水準は低く収入は不十分で、天災に悩まされている。農村開発には、これらの問題を解決するための政策が最重要である。日本で学んだことを国に持ち帰り、カンボジアの農村開発のため今後も努力していきたい。

---

## 日本で習得したノウハウ

サオモニー チャイ  
(公務員(公衆衛生)グループ)

日本はアジア諸国の中で技術の面で先端技術を持ち、経済も世界経済大国である。そうした中で2003年の青年招へい事業に参加したことは幸運だった。カンボジア青年(15名)は23日間のプログラムを通じて、日本に関して、文化・技術を以下のように理解することができた。

日本はインフラストラクチャーが整備されており、人々は協調性がある法律を遵守し、治安が良く、平和な国である。児童・母子家庭・高齢者・身体障害者など社会的障害を持つ人々に対して社会保障制度を確立している。県と市町村が役割分担をし、それぞれ保健所と保健センターを設置することによって、業務が明確にされているため、国民一人一人が十分に行政サービスを受けることができる。また産婦人科では妊婦が定期的にHIVや肝炎や超音波などの検診を受け、100パーセント病院で分娩をし、子供たちは完全に予防接種を受けている。義務教育では給食制度を確立するため、各地方公共団体に給食センターが設置されている。小・中学生は栄養バランスが良い給食を取っている。県立こども病院や県立中央病院(茨城県)には長期に入院している児童のために訪問学級・プレールームが設置されている。院内の設備にも様々な工夫が見られる。日本の公衆衛生協力体制は優れているので、日本では新生児死亡率や乳児死亡率や感染症などが低い。東京の本所防災センター視察では火災や地震などの自然災害を防止するために都民に訓練を実施している。日本国民は自然災害に対する意識が高い。

日本で得られたノウハウは財産として、将来カンボジアの公衆衛生の場に応用し、広く培っていききたい。

最後になりますが、日本国民、JICA、実施協力団体そして関係者の方々に対し、ご支援くださったことに対して感謝いたします。

---

## ◆アジア/インドネシア

---

### 手本にしたい日本人の習慣

エンダン・スシラワティ・レリッチ  
(行政(地方行政)グループ)

このプログラムを通して、たくさんのことを学ぶことができました。その中には私の国、特に私が住む地方の手本になるようなこともありました。

- ① 自己規律と各自の意識の高さはすごいと思います。日本の人達はこれらが大変高く、規則や決まりを守らない人がおかしいと認識されています。日本の人達の自己規律は、一般的には各自の意識によるものようです。

その例として、ごみを決められた場所にきちんと捨てるということや、時間に対する規律が大変厳しいことがあります。

- ② 仕事の質が大変高く、分業がはっきりしているため、各分野の専門的な知識や技術を持った人達が働いており、その結果大変効率的に仕事が行われていると思います。

その例として、山形新聞では1日2回新聞を発行するにもかかわらず、社員は136人しかいませんでした。記者は、一定の質で様々な分野の記事を包括的に書いているため、編集者も苦勞しなくて済みます。仕事の専門化と効率化は、消防署でも見ることができました。

③ 何かを待っている時、読書する習慣がある国です。これはまず私自身が入り入れていきたい習慣だと思います。そして、仕事や友達との交流の中で、またメディアを通して広げていきたいと思います。

最後に私が最も印象に残ったことがあります。

日本の人達は、相手の背景に何があるのかということや、その人の地位や所属に関係なく、他人を尊重し尊敬しています。これはとてもすごいことだと思いました。

---

## 食品・飲料産業における品質管理

メディ マルティナ

(中小企業振興(食品産業)グループ)

このプログラムを通じ日本の状況について知ることができ、また西カリマンタン州産業貿易局・中小企業研修課での業務運営に関わる分野の知識を増すことができた。愛媛県内のいくつかの関連中小企業への視察を通じて、製品の品質管理に対し、政府も各企業も衛生的で安全な製品を消費者に提供するべく大変配慮している様子を知ることができた。同時に、産業廃棄物・排水処理に対しても政府・各企業とも真剣に取り組んでおり、周辺地域の状況も大変清潔で、環境に配慮していた。これらの点に関し、自分の居住地域とは大変状況が異なっている印象を受けた。

これは中小企業の、特に消費者に真に安全な製品を提供するための品質管理指導を進める上で大変有意義であった。その指導普及のためには、衛生的な食べ物の意味と重要性を消費者のみならず、製造者にも啓蒙していくこと、また製造過程においても清潔で衛生的であることの必要性を知らしめていくことが重要であり、併せてその活動の成果を評価し、監視していくことが重要であろう。

最後に、企業訪問時の担当者との質疑応答の時間をより長く予定して欲しい点と、資料をインドネシア語で用意して欲しい点の2点を提案したい。

---

## 世界の発展の中の日本

ノヴィ・インダー・エアリヤンティ

(教員(中学・高校教員)グループ)

桜の国で知られる日本は、日々とても忙しく社会が動いており、ヨーロッパやアメリカと肩を並べる先進国である。一瞬、西洋文化に傾いているような印象を受けるが、実際には東洋の伝統的な一面もまだまだ残っている。すべてが西洋化されているというわけではなく、日本政府や社会は私達に非常に友好的であった。彼らは肌の色は違っても、私達を歓迎してくれ、オープンで飾らないその態度は私達を感動させた。このことは、帯広市長表敬をはじめとする各施設訪問、学校・博物館見学等のプログラム中の訪問先で感じたことである。また、ホームステイは決して忘れることのできない経験となった。これらは、筆舌に尽くし難い素晴らしい思い出である。私達に血のつながりはなくても、彼らは私達をとても温かく迎えてくれ、本当の家族の一員のように扱ってくれた。

日本社会における生活は流動的で、彼らは常に革新的にするにはどうするのか、あるいは創造的に技術の最先端を走るにはどうするのかということを考えているようだ。創造的な若者の力や職場での競争心を蓄えておくため、日本政府は教育を最優先させたのだと思う。日本では、職業キャリアに対する競争は激しく、このことがこれらの自分の持つ能力を引き出せているのではないだろうか。時間をとても大切にし、職場での競争心が養われ、物価も高いこの国は、その結果家族の結束がより強くなっている

ように思う。

日の出る国、日本……確かに常に前進し続けている。日本はアジアの光、日本はアジアのリーダー、日本はアジアの兄というスローガンはまだ残っているようだ。そして、このことは私たちを勇気づけてくれる。故郷へ着いたら、私たちは私たち民族自身のためもっと意味のある何かを始めてみようと思う。

---

## 2003年夏の思い出

フェルディナンド ケクリ

(農業(畜産)グループ)

私は今回青年招へい事業の農業(畜産)グループ参加者として選ばれたことを、大変嬉しく感謝しています。23日間の日本滞在を通して、たくさんを経験し、深く印象に残りました。

8月8日、私たち畜産グループは滞在していた三重で、忘れることのできない経験をしました。三重県国際交流財団の方から、青年に集まるようにとの指示があり、そこで事務局長の南谷様からホームステイを1日延期するという説明を受けました。天気予報によると、台風が三重の方に向かって進んでおり、夜中に三重を通過するため、ホストファミリーと我々双方の安全を配慮しての措置ということでした。

その後それぞれホテルの部屋に戻り、私はインドネシア(パプア)の家族に連絡して、これから起こるであろうことを報告し、無事でいられるように祈って欲しいと頼みました。しばらくホテルのロビーで台風が来るのを待ちましたが、あまりの風にホテルの部屋に戻って、部屋の窓から台風が通り過ぎるのを待っていました。台風はすごい風と雷、そして大雨を伴いやってきました。とても恐ろしく緊張しましたが、一方では初めて台風を直接見ることができ嬉しくもありました。

日本での経験や得ることができた全てのことを、家族やパプアの友人達と分け合いたいと思います。いつかまた日本に戻り、進んだ技術や知識をなどもっとたくさんを学びたいと思います。

本当にありがとうございました。さようなら。

---

## 日本の新しい家族

ハリ・ハルヤント・スティアワン

(地域振興グループ)

このプログラムで一番強く印象に残っているのは、日本人の家に3泊滞在したホームステイでした。

引渡式の前には、彼らとコミュニケーションがとれるのか、習慣、物の見方、宗教など様々なことが異なる人たちと家族のようにつきあえるのか、など不安がつのりしましたが、私がインドネシア人としてのアイデンティティーを示すある種のチャレンジでもあると思い直すことにしました。

ミツコ・オカダさんの家族と対面し話しかけられた時、私はぎこちなく微笑むことしかできませんでしたが、本当の家族(息子)のように迎えられ、家庭の習慣、いろいろな食べ物、社会的に口に出してはいけないタブーまで教えてもらいました。

ホームステイの終わるころにはすっかり強い絆ができあがっていて、別れるのがとても辛かったです。孫のカリンちゃんと一緒にインドネシアへ行くと行って泣き出しました。

今はお別れするけれども、こうしてできあがった関係は、Eメール、電話、手紙などを通して培っていきこうと、私たちは決めました。このような結びつきが家族同士ばかりでなく、国と国(インドネシアと日本)の間にも広がればよいと思います。

---

## 私の思い出の23日間

ダナン アリス ドリアント

(科学技術(IT)グループ)

日本とアセアン諸国の招へいプログラムは貴重な経験となり、永遠に忘れ得ぬ生涯での特別な日々になりました。23日間の滞在は短い期間でしたが、その間にITの知識と認識は一新されました。基盤整備がすでに整っていれば、人材の技術でICTの設置と発展に繋がるのです。私は日本滞在中、特に仕事に関わること、通信、送信系統やIT組織等の理解を高める体験に興味を持ちました。その後、次のように分類してみました。

- －講義は日本のIT産業、内閣府のIT政策と大臣表敬訪問、地方自治神奈川県と千歳市のITの取り組みと基盤整備
- －千歳科学技術大学での光工学の見学
- －コラボ北海道の官、民、大学による3機関一体となつての研究開発と地域の活性化、北海道放送局での地域に根ざした情報送信
- －特に軽井沢における合宿セミナーでは、アセアン青年と日本人参加青年との分科会が行われ各主題を話し合い、結論を導き和英両方での発表

---

## ◆アジア/ラオス

---

### 日本での経験

ボンペット オンケーオ

(公務員(法制度)グループ)

「どんな物を食べ、どのように生活するのだろうか？」日本へ研修に来る前は、心配事ばかりが胸をよぎった。しかし関西空港に降り、温かい笑顔に迎えられたとたん、今までの心配事は一気にすっ飛んでしまった。

大阪で日本についての一般常識を学んだ後、都内プログラムに移った。青山学院大学、最高裁、国会などを見学した後、日本の青年と合宿セミナーに入った。そこでは楽しく意見交換をした。

次は愛媛県に移動し、砥部焼きの絵付け体験や県庁訪問、風力発電所などを見学した。6月27日、ついにこの日がやって来た。それはホームステイである。私だけでなくみんなもドキドキしていた。しかし2泊3日が経ちホテルにもどってきた顔はみんなニコニコしていた。挨拶代わりに「どうだった？」「楽しかったよ」と同じ答えが返ってきた。歓送会ではみんなホームステイの家族との別れを惜しんだ。

最後のプログラムは広島平和公園に行った。その日は朝から雨で、まるで被爆者の涙のように、私には思われた。

プログラムも終わり、OSICに戻った。帰国の準備をしながら、今回の招へいプログラムは短かったが、専門分野について知識を広めることができ、日本の青年とも友情を構築することができたと思った。

これからも多くのラオス(アセアン諸国)の青年達がこのような機会に恵まれることを希望し、日本政府やJICAの今後の更なる発展と活躍を祈りたい。



---

## 日本での体験

シサバス コンフォン  
(社会福祉(障害者福祉)グループ)

日本での体験は忘れ得ない。講義や日本人との交流で日本の人々と社会生活に対する深い洞察が得られた。合宿セミナーでの日本青年との歓談、聾学校での太鼓披露等は特に印象深い。何よりも時間厳守の習慣を身につけたことは重要だ。

福祉制度の講義、職業訓練、聾・盲学校、療育現場の視察や、車椅子の保守実習を通して、業務に役立つ事柄を数多く学んだ。障害者スポーツは自国で即、採り入れたい。日本は街中にユニバーサルデザインを施し、健常者と障害者が共生可能な社会を築き上げている。

日本ではNGOボランティア支援のもと、数多くの障害者が自活を達成している。日本の障害者保障制度を参考にし、自国でも政府の効果的な施策を推進できる環境の構築に取り組みたい。

素晴らしい体験を与え、親切に対応してくださった日本の皆さんに心より感謝を申し上げたい。

---

## ◆アジア/マレーシア

---

### 日本の教育

ファイザー ビンティ デリス  
(教員(中学・高校教員)グループ)

教育施設訪問で私たちは教育現場の生の姿を把握できたと思う。たとえば玉山村の渋民中学での教授法と学習法。海外から外国人を英語教師として招き、お互いの国の文化等を通し生徒たちに国際理解を促していた。しかし、有益な授業見学も時間が短すぎ、ひとつの授業をじっくり見ることができなかったのが残念でならない。今回は、訪問先に良い施設・環境・生徒ばかりを選んでくれたようだが、教育現場の多面性を知るためには、設備の整っていない学校や多少問題のある生徒が在籍している学校を訪問してもよかったかもしれない。私たちが真の姿を知ることで、日本人と教育問題を話す機会があった時に、どうして問題が起こってしまったか、解決するにはどうすればよいかなど、より有意義な意見交換が行われたはずだと感じた。日本で起こっている問題に対する解決方法はマレーシアの同じような問題に対処する際に応用できるかもしれないし、逆もまたしかりだと思う。

---

### 日本での経験

ラティファー ビンティ メライス  
(農業グループ)

日本に降り立つ前には積極的かつ消極的なあらゆる予見があった。しかし日本に着いたとたん全ての疑問は吹き飛び、訪問先の美しさに魅了されていった。日本での3週間では、様々な活動が私達にもたらされた。全プログラムは個々に違った利益と経験を与えたが、中でも一番興味深かったのは“ホームステイ”である。宗教、文化、言葉、習慣の異なる家族と居を共にするこのプログラムは私達には大いなる挑戦であった。最初は怯え、不安だったが、3日間過ごすうちに気持ちは一変し、楽しく晴れ晴れとしたものとなった。多くのことを学んだが、特に日本人の日々の生活、文化、習慣、食事、社会

との関わり方について知ることができた。このプログラムを通じて、私は真の日本人の生活を知り、日本の文化、社会、政治や経済に至るまでの理解を深めることができた。これ以外のプログラムでも私にとって価値のあるものがたくさんあった。これらの経験をマレーシアで友達に伝え、毎日の生活に役立ててゆきたいと思う。

---

## 日本、日出ずる国における体験

ノルリダ ビンティ ジャアファル  
(中小企業振興グループ)

今年は生涯で最も高価な誕生祝いをもたらしたようだ。2003年6月25日は私のちょうど27歳の誕生日、その日に来日した。マレーシア及び日本政府にこのプレゼントに心からお礼を言いたい。青年招へいプログラムは、その意義を知る者にはすばらしく、反対にその真価をを認めない者には無駄以外のなものでもない。日、マの文化をお互いが同時に紹介することにより、多くのことを学ぶことができた。ホームステイは、両国の文化、習慣の理解につながった。両国の文化や習慣をお互いに理解しあい、また尊重しあう態度から学ぶべきものは多かった。ホームステイで経験したことは本当に価値あるものであった。しかしながら、全てがよいものばかりではなかった。出会った日本の若者の中には、既に東洋の習慣を持ち合わせない者もいた。マレーシアもいつかこのような状態にならないとも限らない。一人一人にその評価はかかっているのだ。

---

## 青年招へい事業、思いつくままに

サイダティナル アズマー ビンティ ナズリ  
(保健衛生(母子保健)グループ)

青年招へい事業に参加でき大変良かったと思います。日本や日本人を知る良い機会でした。専門分野の知識を深めただけでなく、日本を成功に導いた要因も学びました。時間管理の素晴らしさは特筆すべきことでした。効率的な時間管理は、努力を成功に導くためには非常に大切です。日本では電車がダイヤ通りに動き、誰もが時刻表を信用しています。そのため日本人に距離を尋ねると実際の距離ではなく、かかる時間で答えてくれる訳です。

母親学級を見学する機会がありましたが、スムーズに流れているという印象を受けました。我々の研修も時間的ロスもなく予定通りに進みました。

老人介護はアセアンをはじめとして各国の抱える大きな問題です。訪問先の保育園は高齢者用デイケアセンターを併設し、核家族に欠けている子供と老人の交流を図っていました。その他帰国後取り入れたい事柄がたくさんあり、日本滞在は大変実り多いものとなりました。関係各位に深く感謝いたします。

---

## 日本文化に学んだこと

イスマイル ビン モハマッド  
(行政(人的資源開発)グループ)

日本社会というのは、世界中の国から多岐にわたって手本になる。

家族間の強い結びつきは至るところで見受けられる。例えば子供達が目上の人に対して示す敬いの心、

親が子供に対する落ち着いた接し方である。

モラルについても早い時期から教育されている。自分達が使った後の遊具をきちんと片づけるといった責任感を子供に教えている。

日本人社会というのは自分の感情よりも他人の気持ちをととても重視している。そして何よりも客人を丁寧に扱う。このことは、私たち参加青年が2月1日のハリラヤハジを祝う日、マレーシア料理を共に食し、なおかつ自分達の祝日を飾るかのようなご馳走を用意して私たちと共に祝ってくれたことからよくわかった。

日本の子供達は時間を守ること、清潔を心がけること、自然を大切にすること等の規律を家庭できちんと教わっている。このプログラムを通じてマレーシアでの生活習慣からは得ることのできない、たくさんのもてなしと素晴らしい経験を得ることができた。

---

## プログラムを通して得たもの

チェオン・チャー・ホン

(地域振興グループ)

2003年度青年招へいプログラムは、私達がこれまで参加してきた研修の中で、最も充実したものであり、参加できたことを皆本当に幸運に感じている。

来日前に行われた日本語、日本文化、生活習慣などについてのオリエンテーションも滞在中非常に役に立ち、このプログラムが実に綿密に準備されたものであるということを実感した。

講義、訪問プログラムでは、「持続可能な発展」に焦点をおいた日本の地域振興プロセス、そして社会福祉や環境保全などに関する幅広い知識を得ることができた。

東京の礪川小学校を訪問した際、先進国入りを果たすためには、早い段階からの教育が不可欠であるということ強く感じた。規律、時間厳守、心身の鍛練、共同活動などに関する教育は、勤勉でモラルの高い社会を作り出す基本であるということここで学び取った。

また、ホームステイプログラムでは、日本人の生活、文化、宗教感、家の内外での衛生管理方法、そしてレベルの高い芸術などを体感することができ、大変有意義なものとなった。

このプログラムを通して得た知識、体験は、帰国後大いに実践、応用できうるものであると確信している。

最後に、このプログラムを成功に導いてくださったJICA、JICE、コーディネーターに心よりお礼申し上げます。

また、期間中関係者の方々にご面倒をおかけしたこと、この場をお借りして深くお詫びしたい。

---

## ◆アジア/アフガニスタン

---

### 日本の経験を祖国復興のために

ファリッド・アハマッド・ハイダリー

(公務員(地域開発)グループ)

日本は平和を愛する国で、国民は教育に熱心であり、また時間に正確かつ厳格である。勤勉な国民は、戦後の経済復興をゼロから始めて短期間に、破壊された祖国の再建・復興を果たした。高速道路建設・整備を行い、経済成長を達成した。その基礎になったのが教育復興であった。その結果、今日多くの分

野で専門家や学者が活躍している。

このような日本の目覚ましい発展や進歩の過程を見ると、すべては、日本人の絶ゆまぬ努力と辛抱の賜であるということがわかる。日本はあらゆる困難を乗り越え、現在では世界各国と友好関係を保ち、平和で安定した社会を築き、技術発展の道を歩んでいる。

日本国民は、戦争で犠牲になった方々を慰霊することを大切にしている。また、歴史的な遺跡等の保存及び美しい自然環境の保護だけでなく、観光開発、農産物市場の確保と拡大にも力を注いでいる。失業者は少なく、公私立の職業訓練校も整っている。身体障害者や高齢者にも就労の機会が与えられている。すなわち、すべての人々の社会参加、雇用問題に関してあらゆる面から方策を講じているのである。

日本滞在中、若い人たちだけでなくホストファミリーも含めてたくさんの日本の方々と交流をすることができた。いろいろな講義も聞いた。いずれも、私たちアフガニスタン青年にとって、興味深く有意義なことだった。私たちも友好国日本の経験とその歩みから多くを学び、祖国の復興と繁栄のために活かしたい。

このプログラムを計画し、実施して下さった関係者の皆様に心よりの感謝を申し上げたい。今後もこのような有意義な交流ができることを望んでいる。なぜなら、それはきっと我が祖国のために有益であるのみならず、その経験は広く活用されることを確信するからである。

---

## 国境を越えた友情

ハミダ・ファイズィー

(教員グループ)

戦争の荒廃からアフガニスタンが復興するためには、教育制度の充実が不可欠です。日本の援助の一環として、今回私たち教員グループは日本を訪問する機会を得ました。プログラムを通じて、日本の教育、地理、歴史、社会、経済等について様々なことを学びました。教育に関しては特に、①小中学校の6年間は義務教育であること、②音楽、美術等の情操教育、③子供の教育のため学校と親が協力していること、等をぜひアフガニスタンでも取り入れたいと思います。

合宿セミナーやホームステイでは、日本の文化を知り、日本人の生活に触れ、日本の人々と友情を育むことができました。また、広島県湯来町の小学校を訪れたとき、教科書にアフガニスタンの村の子どもの生活について記述されているのを知りました。遠く離れた日本の小学校で、子どもたちがアフガニスタンについて学んでいたのです。どんなに国が離れていようと、人の心は通じ合うものと感じました。

---

## ◆アジア/ミャンマー

---

### 素晴らしい贈りもの

ゾーニェインラッ

(教育(職業訓練(機械))グループ)

JICAの青年招へい事業により去る6月25日にミャンマー教育グループ(私を含む総勢19名)が来日した。私は日本滞在中の23日間に実施された研修旅行、合宿セミナー、ホームステイにおいて多くの銘記すべき事柄に出会った。

日本の方々には、相互に尊敬の念を持つことを重んじる。互いに腰をかがめ、お辞儀して挨拶をする。時間と仕事を大切にする。必要ならば、昼夜を問わず仕事をする。個人よりも集団を大事にする気質で

あると思われる。

日本の教育制度では、青少年達が本来の能力を高められる機会がより多く、各学校では実習授業とともに必要な教材が十分に用意されているので、学習教科を素早くかつ容易にマスターできる。日本の青少年達は、より高度な専門教科の研究に携わった場合でも熟達可能な、賢明な人々であると思われる。

通常の教育内だけではなく、学生は誰でも自由にスポーツ活動に参加できることも、日本の教育制度の特徴であると思われる。

帰国も真近に迫ったときに、私達は懇意になった日本の方々とは相互に贈りものを交わした。日本の方々からの最高の贈りものは、日本人の精神、教育の造形、文化といった素晴らしいものだ。

私はそれらを日緬友好関係とともにミャンマーに持ち帰り、ミャンマーの人々、特に青少年達に知らせるため、文学により提示する。私が提示したものにより、誰もがとにもかくにもミャンマー発展の手助けをすることができたならば、私が日本からそれらを待ち帰った甲斐があったと言えよう。

---

## ◆アジア/フィリピン

---

### 農業分野

ロヴェナ プラデス セルヴァンテス

(農業グループ)

私たちの今年の青年招へいプログラムが終わろうとしている。それは「故郷を離れて故郷を知る」このプログラムに参加したフィリピン青年の誰にとっても夢が現実となる瞬間だった。参加青年の1人として、プログラムの目的は決して期待からかけ離れたものではなかったと言える。日本理解基礎講座によって私たちは日本社会の理解を深め、また日本文化に目覚めた。そして、それは私たちにとってその後の日本人青年との交流や親睦のための、私たちとホームヴィジット先の家族との友情と友愛を展開するための効果的な道具として活躍した。

東京や豊川での分野別プログラムも実り多いものであった。いくつかの農業関連施設の訪問や日本の洗練された近代的、精密な技術の見学によって日本の農業の戦略、技術の知識を得た。耕作技術は効果的かつ効率よく適用されている。忘れてはならないのは、有機栽培や水耕法による作物の育てかた、充実した灌漑システムや施設、そして他の多くの見学だ。

また大切なことは、このプログラムで学んだことを分かち合い、フィリピンに適した、また更に強化した戦略を取り入れ私たちの国の発展にフルに活用することだ。

最後に、この価値のある理解に携わった方々に感謝したい。日本の友人、そしてあなた方が教えてくれた貴重なもの、温かな歓迎やもてなし、そして前向きな考え方や規律の正しさ。それらは帰国後に私たちの魂となるでしょう。そんな全てを私たちは決して忘れない。思い出を懐かしみながら、友情を更に育てていく。ありがとう、マブハイ。

---

### 東洋の真珠、日のいづる国

ズレイカ・タングラオ・ロペス、イメルダ・ヴィラムエヴァ・ゲルヴァ

(中小企業振興グループ)

フィリピンの英雄として名高いホセ・リサールは、「若者こそが母国の希望である」という言葉を残しています。青少年を育てることが、ひいては国の発展につながるとも言われています。このたび私達

フィリピンの若者は、青年招へい事業の中小企業グループに参加することで、日本を直接見聞し、その文化や国民を知る機会をいただきました。

墨田区中小企業センターや大田区産業振興協会、台東区の浅草観光センターなどを訪問し、日本の中小企業の動向やさまざまな政策について学びました。そして日本が現在の地位を築くにあたっては、自己を律し、労働を尊ぶ日本人の国民性が大いに貢献したことや、中小企業こそが大企業を支え、日本経済の力強い発展に寄与してきたという事実を知ったのです。

合宿セミナーでの日本の若者との交流は、日本人に対する理解を深めるのに役立ち、また同じアジアの国として共通点もあれば相違点もある両国の間に、相互信頼と友情を築く一助となりました。

特に参考になったのは、100円ショップのサクセスストーリーや、東京都が主催する学生企業家選手権、東京都産業労働局が実施している高齢者のための就職支援制度などでした。

青年招へい事業で来日した中小企業振興グループのプログラムは、まさに大成功をおさめました。短いながら忘れがたい日本滞在を可能にくださったJICA、日本国際協力センター、国際交流サービス協会に対し、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。マブハイ！

---

## 夢の糧

アリアンヌ・ジョイ・ブノアン・オレガリオ

(行政(地方行政)グループ)

日本へ行くことが決まり期待に胸が高鳴った日から数週間を経て、今は帰国を間近にして寂しさを感じています。思い返すと日本での様々な体験が甦ってきます。フィリピン人は皆同じ夢を持っています。フィリピンを良い国にするために、その改革のさきがけになるという夢です。私は日本で、そのために必須と思われる教訓を得ました。

フィリピンの改革には大変な困難が伴うことを、私たちは皆よく知っています。しかし、日本人が今日の発展した日本を築き上げたように、あきらめずに夢を追い求めれば、いつかフィリピンも改革できると気持ちが奮い立ちました。

国が発展するためには人々に強い愛国心がなければなりません。そして同じ失敗を二度と繰り返さないことが重要です。発達し整備された日本の姿に触れるたびに、いつの日かフィリピンも同じように発展することを願わずにいられません。希望を失わずに夢を追い求めようと思います。

夢の糧を与えてくださった日本の人々に感謝します。

---

## 無題

マルセリータ ジャンダヤ ラビアル

(教員(中学・高校教員)グループ)

技術先進国でありながら、自然環境と折り合っている国、日本を訪問することは、私の長年の夢でしたが、ついにそれが叶いました。そして、様々な組織や人々との交流を通して、日本が発展してきた理由がわかりました。機敏さ、勤勉さ、愛国心、そしてもてなしの心が今の日本を造り上げたのです。

ひとりの教師として、生徒たちの若い心にそれらを浸透させ、我が国もそれに習いたいと思います。それは、たやすいことではありませんが、諦めず夢を持ち続ければ、いつか必ず実現すると信じます。

日本を訪問できたことへの感謝の気持ちは、どんな言葉も十分ではないほどに深いものです。これが最初で最後となるかもしれませんが、日本のことは決して忘れません。いろいろありがとうございました。

---

## 青年招へいプログラムにおける洞察

エミリー・ジャネット・ロジヨ・サルバド

(地域振興グループ)

青年招へいプログラムは我々にとって非常に有益であった。この経験は、フィリピンで業務を行う際、我々をはるかに有能にしてくれる。

日本人青年やホストファミリーとの交流から、本当の日本、日本人、文化を学んだ。六本木ヒルズ、周南市、柳井市などを訪れ、発展や先端技術は国の文化財や文化と共存できることが分かった。

強いボランティア精神に裏打ちされた日本人の積極的参加のおかげで、多くのプログラムが実現された。この点はフィリピンでも取り入れたい。

フィリピン地域振興グループを代表し、JICA、WYVEA、世界青年徳山友の会、コーディネーター、日本人青年やボランティアの方々、そして何よりもホストファミリーの皆さんに心からお礼を述べたい。

日本での滞在は生涯の宝物であり、日本で学んだことは我が国にとって有益なものとなるだろう。青年招へいプログラムが、将来もより多くのフィリピン人を啓発し、その生活を豊かなものにすることを願う。

---

## ◆アジア/タイ

---

---

### 私の見た日本

ポーヌマ・ハラブッタ

(公共・公益事業(地方電化)グループ)

私は日本が一目で好きになりました。外観がきれいなだけでなく複数の文化が混じっていておもしろいからです。高層建築と伝統的な建物、規律を重んじる労働者と自由な気風の若者、近代工業と伝統産業といった対照的な要素が混在していること、少ない土地や資源をうまく活用していることに感心しました。

3週間東京と岐阜に滞在して多くの人と知り合いになり、日本と日本人について知識を深めました。古い伝統文化とともに日本には生産性の高い産業と企業が多くあります。日本人は豊かさを求めて懸命に働いたのです。日本は資源が限られているため効率よく活用しなければなりません。

私は日本が大好きです。大企業があり社会が安定しているからだけではありません。日本人が次の世代のことを考えて自然を保護し、常によいものをより良くするよう努力しているからです。

---

### 確固たる日本の地方行政：タイ国でも参考にしたいこと

チャーンナウト＝チャイラックサー

(行政(地方行政)グループ)

日本の地方行政は明治維新後の1871年から現在まで100年以上の歴史があり、その中で頑強な土台が発展してきました。今回の青年招へい事業に参加して、それらを可能にした大きな2つの要素を知ることができました。それは、上部の要素として法と中央政府、下部の要素として地域住民のしっかりした意識です。

1946年の日本国憲法第92条から95条にかけて、日本の地方行政について余すところなく規定・保障がされています。この法的基盤は継続して改正が重ねられ、一番最近では2000年に行われています。その中で地方分権化が推進されるべきことが法律の上でも明確に記されています。重要なポイントは国と地方公共団体の役割分担がさらにはっきりしたことと、より多くの権限が地方にゆだねられたことです。そして最も大切なことは、国がその法律に忠実に従って分権化を推進しているということなのです。

日本の国民は平均して教育を受け生活水準も中流クラスに属しています。それゆえ政治にもある程度の関心を持ち、特に日常生活に一番近い地方行政に積極的に参加しています。また私的な利害よりも公共の利益を大切にする日本人の精神性も功を奏しているようです。

これら2つの大きな要素は地方行政を成功させるための、いわゆる「心臓部」であり、世界共通の要素であります。日本がこの分野で成功しているのも、この2つが揃っているおかげだと思います。しかもこの2つは経済的に豊かだから得られるというものではないのです。

タイの地方行政に携わる我々はこの「心臓部」をいかにしてタイの地に導入し、力強く根付かせるかを考えていきたいと思っています。そしてタイの地方行政をより堅固なものに発展させていきたいと思っています。

---

## 共同浴場（お風呂、温泉）の文化

スタンヤール・マークオン

(中小企業振興グループ)

日本文化の特徴は「統一」と「信頼」である。この日本人の特徴をよく表しているのが「共同浴場の文化」である。このお風呂の文化は、たぶん、多くの外国人にとって理解し難い文化である。しかし、この文化こそが日本人の国民性を最もよく表していると言える。日本青年と合宿セミナーで、私達はお風呂文化が良い文化であることを知った。日本人は一緒にお風呂に入るとき、服を全部脱ぐ。それによって「安全だ」という気持ちが沸き起こる。たとえ見知らぬ人とお風呂に入っていたとしても、皆リラックスして、大部分の人がお互いに世間話などをしているのだ。タイ人が日本人家庭に泊まったり、初めて共同浴場に入るとき、日本人はタイ人の様子を奇異に感じる。タイの文化では、服を脱ぐのは個人的なことで、公衆の面前で裸になることはないのだ。今回、実際に温泉に入る体験をして、相互の信頼によって成り立っている日本人の文化を理解することができた。

---

## 同じ釜の飯

シリボン・ウティタウィー

(教員(ノンフォーマル)グループ)

日本滞在の幸福と笑いに満ちた23日間に咲いた日本人との友情の花は、今後も心に咲き続けると確信している。

仙台は私の経験した中で最も寒い所だったが、むしろ温かく感じた。ホームステイでは、私は春雨サラダの作り方を教え、家族と食べて、まるで以前からの家族のような気持ちになった。ホストのお母さんは私の母にそっくりで、母を思って涙が流れそうだった。

仲間の青年とも、ホームステイの経験は日本を知るすばらしいプログラムだと語り合い、別れの時には涙を流す青年もいた。仙台YMCAの方は、日本には「同じ釜の飯をくう」ときょうだいになるという言葉があると聞いた。タイでも「同じ釜のご飯を食べると愛し理解し尊敬しあうことができる」と言う。



最後に日本の友人たちに伝えたい。共に写真を撮り、活動した日々を忘れない。もしドラえものの「どこでもドア」があったら、私は毎日会いに行くだろう。そして日本の友人もタイに来てもらおう。いつでも私は心から歓迎します。Till we meet again. Sawasdee

\*春雨サラダ：Yam-woon-sean

---

## 一村一品運動の視察から得た知識と経験

ニラン・バマビマーイ

(地域振興(地方産業)グループ)

大分では、一村一品運動により生まれた製品を視察し、その成功の理由の一端を実感しました。また、うまくいかなかった事例を、次へのチャレンジのための力としていることを知りました。

湯布院町は、地域の観光資源開発の良い例であり、映画館が町に1軒もないにもかかわらず世界映画祭を開催するなど、観光客誘致に成功しています。

しかし、政府も地方振興のために重要な役割を果たすことができます。特に、技術開発、研究、コンサルティング、マーケティング、及び資金調達システムの構築等があげられます。

経済面及び技術面で一流国になることは難しいことです。しかし、一国の独自の文化を保ちながら技術面での発展を図ることはもっと難しいことのように思えます。その模範として日本が示していることは、自らの知恵に対する自信、自然、文化習慣の重要性であり、それらは、まず市民ひとりひとりの意識から生まれてこなければならないということです。

\*一村一品運動：One Village One Product Project

\*湯布院：Yufuin

---

## プログラムに参加して感動したこと

アンチャリー・ジャイサイ

(農業グループ)

日本は初めてでしたので、最初のうちは大変緊張すると同時に、これからどんなことが起こるのかと不安でした。大阪や東京では、日本のたゆまぬ進歩と発展を目の当たりにして貴重な経験をしましたし、行く先々で友好的な温かい歓迎を受けましたが、日本人の本当の生活や気質といったものがまだわかっていませんでした。その後沼津市でホームステイをするに至り、それまでの心配はどこへやら、日本の方の温かさ・友好・親切・誠意を感じることができ、忘れ難い絆が生まれました。私達全員にとって、ホームステイが日本滞在中で最も幸せなひとときとなりました。この友好や絆は末永く続くことでしょう。帰国後は、日本人の親切さを語り伝えたいと思いますし、再び日本を訪れたいという夢も生まれました。私達にこのような機会と、国の発展に役立つ知識や経験を与えてくれたJICAに感謝いたします。今回の思い出は、一生私の心に生き続けることでしょう。

## 日本の思い出

チャン ティ ビック ズー  
(教育(教育学)グループ)

国際協力事業団 (JICA) の青年招へい事業により、2003年8月27日から9月18日まで日本を訪れることとなった私たちは、ボーイング747で日本に到着した。このプログラムに参加するためにベトナム各地から選ばれた23名の青年たちの心は、不安と心配でいっぱいだったが、一方では日本の人たちと交流し、日本の文化や社会、特に日本の教育システムについて学ぶことに対し、期待と希望にあふれていた。

私たちが最初に強い印象をもったのは、日本社会の発展ぶりだった。日本は、ベトナムと同じように第二次世界大戦時に長い戦争の時代を経験している。しかし戦後、日本人ひとりひとりが勤勉で努力を惜しまなかったからこそ、また、日本政府の的確で合理的な政策があったからこそ、世界でも有数の大国となり得たのであろう。

日本の教育は、政府による教育改革、教育への投資、教育開発政策等があったために、様々な分野で大きな成果をあげてきた。23日間の日本滞在中、私たちは、幼稚園から大学に至るまでの各段階の学校を見学させていただき、同時に日本の教育状況についての講義も受けた。また、合宿セミナーでは、日本の教員や青年たちとディスカッションを行い、現在日本の教育が抱える問題とその解決策について直接聞くことができた。こうしたプログラムを通して、日本の教育に関わる経験について学び、理解を深める機会を得たことは、私たちにとって大変有意義であった。

また何よりも心に残っているのは、各地の団体の方々、日本青年たち、ホームステイ受入家族 (岡山県里庄町) の方々や町の人々が非常に温かく私たちを迎えてくださったこと、そして、大変細やかなお気遣いをいただいたことである。

青年招へい事業は、大変有益で、興味深く、効果的なプログラムであると思う。このプログラムで得られた知識、経験、情報は、現在私たちがベトナムで携わっている仕事と強い関連がある。この貴重な経験を、ベトナムの教育機関で、あるいはベトナムの青年たちに広め、応用していけたらと思う。

## 無題

レ ティ モン ジエム  
(農業(地域開発)グループ)

あと一晩で私たちの日本滞在が終わろうとしています。明日私たちはベトナムに帰国します。青年招へい事業とも日本の皆さんともお別れです。私たちの胸は詰まり、惜別の感情がこみあげてきます。日本滞在中、私たちは様々なことを学び、様々な場所を訪問しましたが、そのような23日間ももうすぐ終わりです。

日本に来たばかりの頃、私はこの国に対して距離感を感じていました。また知らないことばかりで、なかなか環境になじめませんでした。しかしそれから滞在日数を経、熱心で温かい人々、温かい土地に触れるにつれてだんだんと変化していきました。私が言う「温かい土地」とは、空を突き抜けるような高層ビル、大地と空と広い海と夢を結ぶ橋・ベイブリッジを誇る若い街・横浜です。また潜在力と将来性に満ち昼夜問わずに「太陽に向かう」渴望に溢れ、穏やかな気候の南国・宮崎のことです。また更に

活力に満ち、人々がせわしなく動き回っていて、時間と共に空間と共に変化する街・東京のことです。そこにいる人たち誰もが、将来への夢を抱き、向上心に溢れています。彼らは、自分の抱く夢や気持ちを、彼らの周囲にいる人々に対して意欲的に伝えていきます。

---

## 日本よ、ありがとう

ブイ・アイン・トゥアン  
(経済(中小企業振興)グループ)

私たち経済グループ23人を扶桑の国(中国でかつて日本を呼んだ名称)に運んでくれたKE684便が関西国際空港に到着しました。ここ日本に滞在した23日間は、私たちに日本と日本人についてのよい印象をたくさん与えてくれました。

ラッキーなことに、桜の開花期に日本に来ることができました。私が歩いた道に咲いている桜はどれもみなその美しさを披露していました。それは日本人が示してくれた親切心と客を愛でる心が形となって現れたものではないでしょうか。

空港に足を踏み入れるとすぐに、日本人を賞賛しなければならない事実気づきました。それは、この関西国際空港が海の上に建設されたということです。賞賛すべき建設物はそのほかにもたくさんあって、それらいずれも、日本人の知恵と意志によって造られた物です。

23日間、私たちは、中小企業関連の諸機関と接触することができ、私は、日本の中小企業は非常に重視され、政府の各支援機関の強い関心が寄せられていること、特に、企業のインキュベーターが印象に残りました。

天高くそびえる高層ビルのある日本、ショッピングが自由自在な日本、私は、そういった日本とは異なった日本も見ました。それは、古さと敬いの穏やかさが宿る日本と沈黙思考の日本です。古都京都と大阪城等がある日本です。

JICAのプログラムで日本に招へいされた人なら、ホームステイの日々を忘れる人はいないでしょう。これらの日々を1人の日本人として生活しました。私が家族の一員となった上田教授と奥様のハルコさんのように一生のうち1度しか会うことができない人でも、彼らに対する記憶が永遠に残ると確信できる人もいます。ハルコ夫人よ！私がホテルに戻って寂しくなることを心配してあなたが買ってくれたジャパン・タイムズをずっと大事にしますからね。あなたの心遣いには参りました、ジーンと来ました。あなたは、私の中の27歳の「男」を感涙にむせぶほどに感動させてくれました。

異なった23人の人間が異なった23日間を過ごして得たものは、23の異なった考えと異なった経験だったけれども、私たち全員「日本よ、ありがとう」と一言申し上げたいです。

---

## 日本の国と人への美しい思い出

ホアン・グエン・ヴィエット  
(公務員(地域開発)グループ)

1カ月近くを日本で過ごし、日本の皆さんと出会い、話をし、交流をする中で、私達日本アセアン青年友情計画に参加したベトナム公務員グループの心の中には日本の風土や人々に関する素晴らしい思い出が残りました。また日本の友人達とお互いの国の文化や生活について理解し合うことができました。

まず、日本の皆さんが私達に示してくださった好意、心のこもった受け入れと対応に感謝したいと思います。特に合宿セミナーや交流プログラム、ホームステイを通じ、お互いの国の距離をぐっと縮める

ことができたように思います。ホームステイでは言葉の不自由さはありませんでしたが、私達は自分達の気持ちを一生懸命伝えようと努力しました。驚いたのは、ホームステイの後、私達全員がホストファミリーを自分の本当の家族のように思い、自分のホストファミリーを「お父さん」「お母さん」という親しみのこもった呼び方で呼んでいたことです。恐らく、私も他のメンバーも、美しい桜の国で過ごした日々の思い出を決して忘れることはないでしょう。

日本の皆さんの仕事への意識や責任感・進め方はとても合理的で規律性を重んじたものでした。このことは私達一人一人が今回のプログラムを通じて学んだ重要な事柄であり、ベトナムでも生かしたいと思っています。

受入団体の皆様や様々な人達の助けなしには、プログラムをこのように成功させることはできなかったでしょう。これを機会に、日本の皆さんがベトナムを好きになってくださればと思います。私達は日本の皆様が私達に示してくださった気持ちを大事にし、この友好関係を基に、両国の協力・交流を今後ますます発展させていきたいと思っています。

---

## ◆アジア/東ティモール

---

### 驚 き

ジョアン メストレ マデイラ  
(ジェンダーと開発グループ)

大阪に到着した日の夕方に、私達は店やスーパーを探すために町を歩き回った。しかし店や通りには漢字しか書いてなく、大変困惑した。通行人に尋ねながらようやく見つけることができ、ほっと笑いがもれた。「さあ、買い物だ！」

大阪から東京に向かう途中、新幹線に乗った。私達にとっては初めての経験だった。「これが新幹線か、鯨みたいな形だな。早く乗ろうぜ！」車内は寝ている人あり、乗り物酔いする人あり、この驚きの経験を楽しむ人あり、様々だった。東京のホテル到着後も興奮冷めやらず。なんてったって初体験だったしね。その後、合宿セミナーのため三浦市に向かった。そこでも更にびっくり。数人の青年が大浴場を体験したのだ。とにかく予想外のことに、混乱するばかり。自分が人形になったつもりで、とりあえず入ってみた。日本の文化に適應しなければね。初めは恥ずかしかったが、やみつきになりそうなほど気持ち良く、そのおかげでぐっすり眠れた。

奈良からOSICに向かう途中に通ったトンネルにも驚嘆した。10分ほどしてトンネルを出てから後ろを振り返った。そこには奈良と大阪を分かち山がそびえ立ち、それにもまた驚き！ だった。

---

## ◆アジア/バングラデシュ

---

### 日本訪問：国際交流

ヌメリ・ザマン  
(地方行政1グループ)

日本は素晴らしい国である。

この国を訪れる機会を、国際協力事業団（JICA）は南西アジア諸国に対して、青年招へいプログラムという形で与えてくれた。この機会を与えられた者は大変貴重な体験をすることができる。私達のよ

うに、将来バングラデシュのリーダーとなるべき若手官僚が、最大援助国である日本を訪れ、理解を深めることは、これからの両国関係においても大変有意義である。

私達は日本社会、文化を実体験すると同時に日本の方々にもバングラデシュとその国民についても理解してもらうことができた。「ワンデイ・ボランティア」、「合宿セミナー」、「ホームステイ」を体験し、各種の施設を視察し、「日本と日本人」並びに「戦後日本の歩み」について講義も受けることができた。

異国を理解することは容易なことではなく、特に言語が異なる場合は、とりわけ困難になる。このプログラムはその点も考慮し、短期間とはいえ、日本語学習に可能な限りの時間を割いてくれていた。日本語学習は私達が祖国を出発する2日間前から始まり、日本到着後もあらゆる形をとりながら続いた。おかげで、私達の日本語はとても上達した。

日本語学習の成果は「ワンデイ・ボランティア」で試されることになった。この日、私達は日本人ボランティアの方々の助けをかりながら、楽しく日本語で動き回る方法を身につけることができた。おかげで、外出も容易にできるようになったばかりか、この日出会った日本人ボランティアの方々は私達にとって忘れがたい良き友人となった。

2泊3日にわたる合宿セミナーでは、更に多くの日本人と出会うことができた。3つのグループに分かれ、議題を決めてディスカッションを行い、日本人とその文化や歴史について知り、現代の若者の生の声を聞くことができた。

ホームステイ・プログラムでは、日本の人々、家族とその生活について具体的に知る事ができたばかりか、私達と日本の人々との関係はより深まった。私達が出会った日本の人々は、皆優しく、礼儀正しく、協力的で、親切でと、何と表現したらよいのか分からないほどだ。

私達の青年招へい事業は大成功に終わった。このプログラムを通して得た知識、深めた理解、培った友情は、今後両国の関係にとって必ずやよりよい成果をもたらすことになるだろう。

---

## 東京の自由行動

ナジマス・サヤダット

(地方行政2グループ)

2003年7月28日は、自主研修日だった。ふじの研修センターで私のルームメイトだった橋本圭司さんと一緒に外出した。私達は、東京大学キャンパス、神社、スーパーマーケット、レストランなどに行った。東京大学では私は、日本の習慣に初めて直面した。というのは、警備員に管理棟をたずねた時、橋本圭司さんは「はい」と「分かりました」を繰り返しながら会話を続けていた。この光景を見て、私は日本人同士の会話に慣れることができた。

また、教育の神様をまつっている神社を訪問したことで、日本の宗教と宗教儀式を理解できた。私は、性格タイプテスト・ボックスから紙を取り出して、自分自身を診断した。しかし、木のプレートに書かれていた内容は、私の望むことではなかった。

スーパーマーケットでは、日本の「四季の歌」が入っているCDを探した。橋本圭司さんは、2人の店員と共に、長い時間をかけてやっと見つけ出してくれた。日本人のやさしさを感じた。

最後に日本食レストランに行き、完璧な日本スタイルで夕食をとった。2種類のスープがあり、私達はスパイシーな方を選び、魚フライ、サラダも食べた。この夕食で和食のメニューと食事の仕方を学んだ。短時間で、日本の人々を理解させようと、橋本圭司さんは私をいろいろな場所に連れて行ってくれた。私のために時間を割いてくださったことに感謝している。

## 日本での経験を活かす

ミヒール クマール シン

(農業グループ)

### 1. 日本及び日本人に関する理解の深まり

日本理解基礎講座及び日本語学習は、その後の新しい出会いや体験に向けての良い導入となった。ワンデイ・ボランティアでは日本人青年と京都を訪問し、伝統と現代社会の調和を目にすることができた。佐島マリーナでの合宿セミナーでは、各自の積極的な参加により、両国青年の間に深い絆が築かれた。グループディスカッションでは、日本の家族や教育制度等について学ぶことができ、有益であった。ホームステイは日本人の生活を知る良い機会であった。学校や病院の視察も日本に関する我々の理解を深めてくれた。

### 2. 専門知識の習得

農林水産省、深川政府倉庫、東京農業大学厚木キャンパス等への視察は専門知識の習得に役立った。中でも、長井有機農法研究会及び沖縄県ミバエ対策事務所への視察が有益であった。

### 3. 今後活用したい知識

帰国後は学んだ知識を活かし、食糧備蓄制度の改善とミバエの根絶を試みたい。

---

## ホストファミリーとの日々

キャロリン・ゾーラムタンギ

(職業/技術訓練グループ)

私のホストファミリー、静岡市に住む獅倉家のメンバーは、ご主人の浩さんと奥さんの容子さん、そして子供達、円ちゃんと大己くんです。

青年招へいプログラムの中で、率直に言って「ホームステイ」が一番でした。家庭の雰囲気の中でくつろいで、日本の生活や文化を経験することができました。とりわけ良かったのは、子供達と一緒に過ごした時間。私の子供達も同じ年頃で、皆さん母親ならわかってくださるでしょうが、離れていて寂しく思っていたからです。

買い物をはじめいろいろな場所を訪ね、日本食もいろいろ挑戦しましたが、中でも天麩羅が一番気に入りました。私もインド料理を作って、皆さんおいしいと言ってくれました。お世辞でないの良いのですが。

ホームステイの間、時はあっという間に過ぎていきました。私はホストファミリーの皆さんが親切にしてくださったことを決して忘れません。

獅倉一家に万歳三唱！

---

## ◆アジア/ブータン

---

### 無題

ニムー・アミナス  
(教育(初中等教員)グループ)

日本での生活は喜びと楽しさで一杯でした。日本の人々は私達を歓迎し親切に世話をしてくださいました。私達は日本の文化から良いマナーをたくさん学びました。日本の辞書には「ネガティブ」という言葉はないようでした。また日本は環境がきれいであり、世界の模範となるべき国です。来日後「教育」の意味を誤解していたことを認識しました。「教育」とは単に教科書に印刷されていることだけではなく生きていく上で直面する全てのことについて必要なことだと知りました。教育は教師や学校のみのも責任ではなく社会全体が取り組まなければならないことです。学校は子供に正しい道を歩むよう指導する場です。日本では人間は誰でもなんらかの障害を持っていると考えられ、障害児と普通の生徒と区別はされていません。青年招へい事業は色々な面で私達の視野を広げてくれました。私達の国にぜひ取り入れなければならない「ボランティア精神」を学びました。日本が大好きです。

---

## ◆アジア/ネパール

---

### 日本の人と社会

ディパ・ハマール  
(教育における地方分権グループ)

日本人関係者の対応は終始礼儀正しく丁寧でした。22日間の日本滞在中、日本人の礼儀正しさや規則正しさ、規律を肌で感じました。日本の発展のために尽くした日本人の不断の努力、知恵と見識に触れました。ネパール人も見習うべきです。日本社会は全ての面で発展しているが故に国民生活が豊かで幸福なのだと思いました。得意分野で自分の力を発揮することが日本人にとっての幸せのようです。食事、清潔さ、健康管理、生活様式の故に日本人は長寿で創造的で勤勉だということを折に触れ感じました。公共財産の保護、自治体の積極性、人材活用等で日本は世界有数だということを見学や講義などで理解しました。茶道、合宿セミナー、ホームステイで日本人の優しさや、文化・芸術・伝統に感銘しました。吉川町で受けた歓迎と愛情は忘れられません。日本人は忙しく、家族と過ごす時間がないように感じました。しかしネパール人と日本人には共通点もあると思いました。

\* 吉川町：よかわちょう (Yokawa Town)

---

## ◆アジア/パキスタン

---

### 私の見た日本

アーサン・アリ・マンギ  
(地方行政1グループ)

説明し難い奇跡の経済発展でなく、社会・環境・経済課題に取り組む成熟した2003年の日本に来日す

ることができた。

「消費者は神様」の標語、生来の謙虚さ、強い達成意志、強い日本の価値制度と限りない技術進歩の両輪とで社会の均衡を保とうとするたゆまない努力、これが今日の日本である。

常に時間厳守の努力、注意深く詳しい説明、「大きな荷物と小さな荷物」に分ける効率、日本各地への訪問は、この21日間の日本での滞在をよく説明している。苦心している他国の成功例となる、戦後の灰から立ち上がった驚くべき日本社会の活力だけでなく、家族の価値、企業、張力が複雑に混ざった社会も見た。

日本と日本人は、達成する才能で本当に世界を驚かせ続け、謙虚なお辞儀と愛らしい微笑みで世界に呼びかける。行動を起こそうではないか／いかなる運命であろうとも熱意をもって／さらに達成し、さらに成し遂げ／働くことと待つことを学ばん

---

## 知識、友情、思い出

サルマン・アフマド・ハーン

(地方行政2グループ)

青年招へいプログラムという、得がたい機会を与えられ、私達一同、日本と日本人について多くのことを知りました。中でも、地方行政の仕組みと日本の文化に対する深い理解が得られました。中央・県・市町村という3つの階層からなる日本の行政システムがうまく機能している現実、今後パキスタンの地方行政を構築する上で、大変参考になります。

日本はパキスタンの多くの人にとって、遠い国であり、日本に関する知識もありません。しかしながら私達は、日本人が親切で、正直で、礼儀正しく、時間を守る優れた資質を持っていることを知りました。このように素晴らしい人達と交流できたことを忘れることができません。

先端技術の追求と過去の文化遺産の保存を見事に調和させることができるのも日本人の特性です。それ故に、日本は自然と文化遺産を損なうことなく技術大国へ成長することができたのです。私達は3つの宝物を持って帰ります。それは知識、友情、思い出です。

---

## ◆アジア／スリランカ

---

### 滞日経験の帰国後の活用法

チンタ・プリヤダルシャニ・マラルゴダ

(理数科教員グループ)

第二次世界大戦後、日本人は国の再建のため多くのことをしなければならなかった。1950年代から1970年代には、日本人は全力で国の経済を維持し、高水準を保ち続けた。多くの日本人の宗教は仏教である。「5S」や「カイゼン」の概念も根底には仏教がある。

1970年代からこれら概念が日本の社会に利用され始めた。そして今日、日本社会のどの分野においても、これらの概念が監視を怠ることなく取り入れられているのが分かる。また、「5S」や「カイゼン」の概念は日本人にとり日常生活にも取り入れるほど身近なものであった。総理大臣から市井の人々に至るまでのあらゆる階級の人々での間で。

私は日本人にこの概念について尋ねてみた。しかしほとんどの人が、この概念を説明できなかった。しかし、日本人はこれらの概念を応用でき、また日々の生活に実践しているのである。そして、日本人



が時間厳守、事前の計画、清潔さの保持といった、よい資質を維持する理由はこのためなのではないだろうか。

現在、スリランカでは『5S』や『カイゼン』の概念を導入中である。私達はスリランカ社会にこれらの概念が育つようにしたいと願う。そして、スリランカが開発国になる、という夢を実現したいと望む。

---

## ◆アジア/モンゴル

---

### 日本でのモンゴル教員たち

スヘバートル・チンゾリグ

(教員(地方教員)グループ)

モンゴルから来た10人の教員は、JICA青年招へい事業に2004年1月21日から2月11日まで参加しました。このプログラムに含まれていた講義や、日本の青年たちと協力して行った様々な活動、東京や二本松での学校視察、地方での観光で史跡や博物館、海や工場などを見たことは、私たちが日本人や日本の社会を理解するにあたり、大変有意義なものでした。

私たちの主な目的は、日本の教育現場での子供たちを教え育む活動や教育制度を知ることでした。日本に来て、ある学校の活動を通して見せていただき、教員の方々と意見交換したことや、文部科学省および都の教職員研修センターでの講義、合宿セミナーでの日本青年との自由な討議は、専門知識の向上に役立ちました。

このプログラムに参加して、自国で活用できそうな新しいアイデアをたくさん得ることができました。例えば、①子供たちの権利を尊重すること、②学校内の清掃を全校生徒が短時間で行うこと、③年、学期、週単位の目標を計画し教室に掲示する、④子供たちのために保護者、教師、地域が協力すること、⑤全生徒の図画工作等の作品を掲示し、それを授業にも用いること、などをあげることができます。

---

## ◆アジア/ウズベキスタン

---

### 私の眼で見た日本

ウルマスバエワ グルチェフラ

(マスメディアグループ)

日本は光に満ちています。その光は心から桜を愛し、愛でる人々の心から発しています。桜のその明るさは岩の上さえも美しく彩っています。

日本はとても慎み深く、自分の美しさを声高に叫んだりしません。けれど絹のように柔らかく包んでいるその慎みの中に日本の文化的伝統の美しい輝きを見ることができます。

日本人は新しいものに対して高い感性を持っています。日本人の特性、知識を得、理解し、他者のすべてのよりよいものを学び受け入れて自分のものにしていくところは、私にとって新鮮なものでした。

最も驚いたのは、他者から学ぶことを隠したりしないことでした。人間的な知識をまるで芸術的な生け花のようにさまざまにアレンジし会得することを日本人から学ぶことができたのは、とても幸せなことでした。

日本の社会では古い文化の伝統を心の中から追い出すことなく、新しい時代にも広く受け入れられていることに驚きましたが、この調和が、大きな魅力になっているのだと思います。

日本 それは桜の彩り、水の香り、優しい陽の光、そして美しく善良でナイーブな人々。

日本 それは私の心の中に残るファンタジーです。

---

## ◆アジア/タジキスタン

---

### 青年招へいプログラムに参加させていただいて

ジュラエフ・カビルジョン

(地域振興グループ)

中央アジア混成・青年招へいプログラムは、ハイレベルで、興味深く、充実したプログラムでした。このプログラムによって私たちは、専門的なことはもちろん、日本の文化、伝統、風習を学ぶことができましたし、親しい日本の友人を得ることができたと思っております。それと同時に、自分たちの国の文化紹介もできました。

私たちは、常に日本人のホスピタリティーと温かな情に包まれていたおかげで、まったく外国にいる気がしませんでした。プログラムの細部にいたるところまで優れており、バランスもよくとれておりました。また、このプログラムに関わってくださったすべての方のおかげで、私たち青年にとってごく自然に「日本」という扉が開かれ、無理なく、日本と日本人の中に入っていくことができたと思います。

北海道でのプログラムの素晴らしさは、格別でした。密度の濃い講義、様々な見学先で得た知識は、私たちの視野を広げてくれました。

このプログラムに関わっていただきましたJICA、JICE、YMCAの皆様、YMCAの佐藤様、研修管理員の佐久間さんと山田さんに心からの感謝を申し上げます。プログラムの間中、私たちにとっても優しく接していただきまして、本当にありがとうございました。

---

## ◆アジア/アルメニア

---

### プログラムに関する所見

ゲガム ペトロシャン

(地域振興(中小企業振興)グループ)

この青年招へいプログラムは、地域振興という目的に沿って訪問先も綿密に選定されており、全体的にきちんと企画運営されていた。今後このプログラムをより完全なものとするために、いくつか改善点を挙げさせていただく。

- 1) 短期間にあまりにも多くのプログラムが企画されていたため、結果的に専門的なレベルでの議論ができなかった。
- 2) 全てのプログラムが一般的だった。これは外国を訪れる一般的な旅行者には興味深いものと思われるが、私達のような専門家には、すべてのプログラムにおいてよりつつこんだ研修が望ましかった。私たちの具体的な質問に対する具体的な答えが聞きたかった。

文化的プログラムについていえば、綿密に計画されしかるべく執り行われた。このプログラムのおかげで私達は日本の豊かな文化や歴史に触れることができ、日本の伝統についても知識を得、よりよく理

解することができた。

和歌山県でのプログラムは興味深いもので、行事が適切に組織運営されており、日本の地方の暮らしを内側から知る機会を与えてくれた。同様に、来日青年全員がホームステイ体験できたことも楽しい思い出である。

ただ一つ残念に思われたことは、私達がお世話になるホストファミリーについての情報を事前に行うことができなかったことであり、たとえば、その家族構成やどんなところに住んでいるかなどについて知りたかった。日本の家庭にホームステイしている間の私達の権利と義務についても具体的に説明してほしいかった。ホストファミリーとのマッチングについても更に細かく検討していただきたい。

私達全員の母親のようにいろいろと世話をしてくれたコーディネーターの配慮と深い心遣いについても追記しておきたい。

全体としてこの青年招へいプログラムは興味深いものであり、私達は自国に受け入れ生かしていきたいと思う多くの経験をする事ができた。また日本人のホスピタリティーや善良さを一般の人々にも伝え、日出る国で芽生えた日本の友人達との間の友情をずっと続けていきたいと思う。

---

## ◆アジア/キルギス

---

### 日 本

アルマス・ディカノフ

(社会福祉グループ)

日本はとてもユニークな国です。最も私達の心を打ったのは日本人の礼儀正しさでした。日本での滞在中、我々のグループの全メンバーが地下鉄で人々の礼儀正しさに感動しました。何度も日本人に道を教えてもらいました。

養護施設では子供達が悪いことをした時、罰を与えるのではなく、大人達が正反対の接し方をしていることに少し戸惑いを覚えました。彼らは子供達を抱きしめたのです。

私達は皆、各々の国で子供の危機管理に関する日本の方法論を用いたいと思っています。

---

## ◆アジア/グルジア

---

### 日本と青年招へい事業についての我々の思い

ウチャ オレグ ネビエリゼ

(保健衛生(母子保健)グループ)

我々はコーカサス3国、アルメニア、グルジア、アゼルバイジャンから来日した。日本滞在中に我々が抱いたほぼ一致した意見は、日本には標準的な生活を送るための環境が整備されているということであった。同時に我々の注目を集めたのは、この国の技術が、保健分野でも発達しているということである。

我々はこのプログラムのおかげで日本の保健制度を知り、日本と我々の国の保健医療分野での様々な違いを確認することができた。医療技術や治療方法に関しては我が国ではまだまだ利用不可能なものや、我々の国でぜひ取り入れたいものなどを知ることができた。

特に我々が高く評価したいのは、若い世代の親達が育児についての情報を得ることができる子育て相

談センターであった。

我々は日本で見たハイレベルの医療技術を備えた病院と同様のものを自国で設立するために、資金提供者探しを含め、努力していくつもりである。

JICAの青年招へい事業に関しては、プログラムはユニークで内容も多岐にわたっており、すばらしい事業であると思う。

我々も、いつの日か自国において、このような事業を展開することができたら嬉しいと思っている。

この事業を企画してくれたJICAと、事業に関わってくれたコーディネーター、日本青年の皆様、そして日本国民に感謝の意を表したく思う。

最後に、日本と我々の国の関係が将来にむけてさらに、友好かつ密接になることを期待している。

---

## ◆アジア/カザフスタン

---

### 無 題

シュキルベコフ アスハット  
(中高等学校教育(職業教育)グループ)

各受入団体がJICAの主催のもとで計画・実施している青年受入事業が日本の青年と他の国々の人々との友好的関係の確立・発展に大きく貢献していると思う。

日本の青年との交流やホームステイは、我々にとって日本社会について理解を深める機会であった。こうして得られた知識は、マスコミ、書物、インターネットなどでは決して入手できないものであるからこそ、大変貴重なものである。交流を通じて我々は日本人の心をもっと深く理解できた気がする。また、日本人が抱えている悩みや心配事の多くが我々のとよく似ていることも発見した。

さらに、行政機関や教育現場を視察し、日本における青年の教育と人材育成のあり方について様々な情報を得た。この情報は各国の人材育成制度の確立に適用されるなど、参加者一人一人の職務に反映できる余地はきっとあると思う。

青年招へい事業に参加し、日本の社会、文化や伝統がより身近になったと感じる。ここで得た知識などを中央アジア地域と日本との文化的、経済的、政治的な交流の拡大に役立てたいと思う。

---

## ◆大洋州/ツバル

---

### 青年プログラムで私の仕事に関連した知識習得に役立った体験

カイナキ ファラバイ  
(社会開発(小中学校教育)グループ)

この感想文の場をお借りして、このプログラムで得られた、私が自分の教師という仕事に関連した知識習得に役立つ経験について印象を述べたいと思います。

学校などさまざまな場所への訪問は、新たな技術や知識を学ぶ大いなる機会となりました。この技術や知識を国に持ち帰り、生徒、教員、家族、地域、そして青年と分かち合いたいと思います。しかし、それにもまして大切なのは、互いを尊敬すること、生徒一人一人を平等に扱うこと、時間の正確さ、正直さといった価値観を共有することであり、レクリエーション活動を促進し、ひいては愛、気遣い、尊敬を外国の文化にももてるようにすることです。これらの価値観すべては、私がプログラムを通して、

そして大切なホストファミリーからホームステイ中に体験させてもらい、自分の目でみたことなのです。

私がプログラムを通して習得したこれらの経験と知識は、太平洋諸国と日本の関係のさらなる発展に大きく寄与するものであろうと確信しております。

南太平洋青年を代表して私が最後に申し上げたいのは、私たちは皆、人間であり、そして世界平和実現のために、生き、分かち合い、協力し合うことのできる存在であるということなのです。

---

## ◆大洋州／トンガ

---

### 日本を理解する上で役立ったこと

ライサーン・アモン

(経済開発グループ)

このエッセイでは日本人々と社会を理解する上で役立った事柄について述べたいと思います。

日本の国土の80%は山で20%のみが平地ですが、その限られた土地をできるだけ有効に活用して経済発展を遂げています。太平洋諸国では結婚が早く子供の数も多いですが、日本では経済的な理由と晩婚化から出生率は1.5人以下に下がってしまっています。

教育の面では、日本では6歳から15歳が義務教育で、それ以降大学まで続けるかどうか自分達で決めることができます。その後はなるべく安定した仕事に就こうとします。日本の職場では男性が多く、年功序列を取り入れています。退職は60歳で55歳から早期退職手当が貰えます。

女性の社会進出については、以前に比べれば機会は増えたものの、社会で成功し、また家庭でも幸福になるにはまだまだ解決すべき問題があります。

結論としては、男性と女性の関係について私たちの国と比べる点があり、個々の国で異なったそれなりの生活様式があるということです。

---

## ◆大洋州／ミクロネシア

---

### 評価エッセイ

クリスティナ フィルメド

(環境保全グループ)

日本に対する理解を深めるのに最適だったのがホームステイだ。時には困難もあったが、日本の神髄にふれる鮮明な窓が開かれたことは間違いない。ホームステイは旅行のハイライトだった。青年は全く別の環境に放り込まれるが、その見返りははるかに楽しいものだった。私は知っている限りの日本語をフル活用した。また家族から寄せられた親しみの感情が、人間は本質的には同じだという気持ちを持たせてくれた。私は阿寒町で、久しぶりに帰省した家族の一員のように扱われ、両親を「お父さん」「お母さん」と呼び、自分の家に帰ったかのように感じた。あちこちに連れて行ってもらい、多くの人達に紹介されて最大限に楽しむことができた。ホームステイプログラムに感謝する。ホームステイは海外青年が日本滞在中に培った絆をさらに強めた。ホームステイの経験は技術研修が主だったプログラムに個人的、人間的な感触を加えてくれ、消えない刻印を心に残してくれた。

## 各プログラムの印象

ステファン・グレン・コメ

(教育(小中学校教育)グループ)

プログラムの印象を以下の4点から述べたいと思う。

まず講義と合宿セミナーでは様々なことを学び意見交換できて、大変有益だった。学識高い講師から最新の情報が得られ、戦後急成長を遂げた日本の秘密が分かった気がした。

次に、施設見学はプログラムのハイライトに当たるもので、労働者や学生の日常生活を垣間見る良い機会であった。一介の公務員が国会議事堂やマツダの工場を訪問できたのは歴史的なことだ。

3番目に、ホームステイは最も楽しく、かつ最も悲しいプログラムだった。親切で控えめな印象のホストファミリーは、心から私達を歓待してくれ、終わりに近づくと胸が詰まった。たとえ生活様式は違って微笑みあえばお互い理解できた。

最後に、このプログラムは本当に素晴らしく、日本での体験は決して忘れないだろう。中でも国の生徒達にぜひ伝えたいのは、「時間厳守」である。これを学べば、我が国の生活はあらゆる点で大きく進歩を遂げるだろう。

## 日本での初体験

ルーシー カピ

(警官グループ)

日本について、違う認識を持っているパプアニューギニアの人は多い。私自身、ジャーナリストとして、この偉大な国のことを知らなかった1人である。

2003年度の青年招へいに14名の警官グループと共に参加し、東京、栃木と回った。警察関連施設の訪問や文化交流プログラムを体験したが、私なりの印象を述べたい。

### 1. 仕事に対する態度

時間管理が日本の産業発展の要因の一つである。彼らは真面目に働き、時には手当なしの残業もしている。

### 2. 文化と伝統

今回、日本の伝統文化を体験し、日本人がいかに文化伝統を守り、誇りを持って若い世代に引き継いでいるかを見た。

### 3. 特徴

日本人は謙虚であり、世界の名だたる国というイメージとは裏腹である。その人の地位に関係なく、誰に対しても親切で敬いの気持ちを持っている。

私は、満足感を持って帰国できる。文化、伝統を通じて互いの理解を深め、我が国と日本の関係はますます発展するものと思う。JICAをはじめ、関わってくださった方々に感謝したい。

---

## ◆アフリカ/カメルーン

---

### 日本での素晴らしい体験

ヴェロニック ケイ

(女性教員グループ)

私が日本の滞在中に発見し関心したことが2つある。それは「くもん式」と学校の給食制度である。

くもん式教育法は、ある教科で苦勞している生徒がそれを乗り越えるために、とても効果的な方法だと思った。学校生活及び社会生活における自己管理にも高い成果をもたらすことであろう。さらにこの方法によって生徒達は責任感や自己訓練の姿勢が自然に身に付くであろう。

給食制度を導入すると、生徒達は食事(昼食)と一緒に分かち合う楽しさを分かるようになるであろうし、社交性も育つであろう。

私はぜひとも「くもん」と「給食制度」をカメルーンに導入してみたい。

---

## ◆アフリカ/ガボン

---

### 日本からアフリカの国々へ

エルベ・ロメオ・ベカレ・ンツウム

(理数科教員グループ)

私達は青年招へいプログラムを通じて様々な機関や施設の訪問、合宿セミナーやホームステイから真の日本の姿をみた。

日本の文化や社会もアフリカ同様、絶え間なく変化し続け、異なる文化との融合が行われている。各国政府の努力にもかかわらず、若者の間、とくに大都市においてはその現象が顕著である。

日本は経済力があり優れた技術を持っている。それにより教育分野に多くの資金を投入することが可能だ。数学において見る限りでは小学校から高校まで各種の設備・機材がしっかりと整っている。例えば津山市の米来・高倉小学校では図形の授業でマグネット式の教材を使用し、児童たちの理解に大変役立っている。また附属駒場高校においてはパソコンを使用した授業で数学の素晴らしいソフトが利用されている。

素晴らしい潜在能力をもつ国民こそができてきたことなのだ。

日本人たちが持つ素晴らしい特質—几帳面さ・一つの目的に向かう毅然とした態度・労働における正確さ—を我々アフリカの将来に向けて子供たちに教えたい。

---

## ◆アフリカ/南アフリカ

---

### 最高の経験はお金では得られないもの

タミー ナイク

(女性教員グループ)

1) OSICに到着し、すぐに心温まる歓迎を受けた。日本理解講座で日本は私にとり知識の宝庫である

と確信した。日本語学習も有益であった。生まれて初めて新幹線と観覧車に乗った。表敬訪問をはじめ、様々な施設訪問のたびに敬意を持って受け入れてもらった。

2) 日本滞在におけるハイライトは、清明小学校、駒ヶ岳、ホームステイ、合宿セミナーであった。清明小は模範的な活動や教職員間のチームワークを通じ生涯学習推進に取り組んでいた。生徒一人一人に対応しており、この点はぜひ南アフリカで参考にしたいと考えている。風紀、規律、衛生面に関するきめの細やかな校則を導入している。更に、給食制度を採用して生徒の健全な心身の育成に努めている。

駒ヶ岳やホームステイの体験で、私は日本人の価値観、倫理観を学ぶことができた。家族と行動と寝食を共にし、生きているんだということを実感した。

合宿セミナーでは学校の規律や親の関わり方、文化の多様性、生活習慣を学んだ。文化的なプログラムも数多く組み込まれ、ここで習得した知識は必ずや私の指導法や、技術を高めてくれるだろう。

3) JICAのボランティアプログラムは、生涯学習推進に向けてすばらしいコンセプトである。南アフリカでもぜひ導入したいと考えている。恵まれない青少年の見聞を広め、学習機会を与え、能力開発させることで21世紀の教育制度を確立することができるであろう。

---

## ◆アフリカ/ケニア

---

### 日本と日本社会

ジョセフ インザウ ムツア

(理数科教員グループ)

青年招へい事業で日本に23日間訪問し、日本への理解が深まった。JICA、ケニア・日本両国政府に感謝する。

日本では特に鹿児島県に滞在し、本当に日本が好きになった。多くを学んだが、そのうちの大半を三島村でのホームステイで学んだ。台風で1泊だけとなってしまったが。

ホストファミリーの安永さんが日本文化をたくさん教えてくださった。村の重要な場所に全て案内され、各々の重要さの説明を受けた。安永さん宅ではお料理や飲み物をたくさん出してくださいました。夕食時のことだった。魚がとても甘いのには気が付いた。魚を食べるのは初めてだったが、これからは絶対に魚を食べるだろう。食事後、ケニアと日本の文化について安永さん一家とたくさん語った。その中で、日本人は教育や自分の大切な物を大事にし、友情を育み、また、いつでも人を助けることを知った。とりわけ日本人は常に学び、人を愛している。

好きになった日本を決して忘れない。この愛しい日本にまた来たい。

---

## ◆アフリカ/ウガンダ

---

### 青年招へいプログラムを通じて得た知識/情報

ウィニー ナツソロ

(保健衛生(公衆衛生)グループ)

青年招へいプログラムで日本人と日本について多くのことを学んだ。

このプログラムで得た大多数の情報は私個人にとっても私の国にとってもあまりに専門的で高度すぎ



た。そのような中で東京の国立保健医療科学院で受けた瀬上先生の講義はたいへん有益だった。第二次世界大戦後の日本は感染症、飢餓、劣悪な状況に悩まされていたと聞かされた。そうした悲惨な状況から抜け出すことができたのは日本人がグループや地域ぐるみで感染症の蔓延等に繋がるゴミの撤去などに協力しあったことにある。その精神は今日も受け継がれ、日本では感染症が問題となっていない理由となっている。

私の国には欠けている、感染症と戦うための地域ぐるみの協働精神を持ち帰りたい。感染症は私の国では深刻な問題であるが、かつての日本のように、いつかは感染症予防に役立つであろう。少なくともそれは何の技術も必要としない。

国立保健医療科学院に、特別なビデオを見せていただいたことに感謝したい。

---

## ◆アフリカ/ニジェール

---

### 日本の印象

アイシャトゥ・ブカリ

(保健衛生(公衆衛生)グループ)

社会生活に関して、日本人のその模範となるような行動が素晴らしいと思いました。日常業務において仲間同士でもまた第三者に対しても規律が重んじられ、真面目で、時間厳守を尊ぶ態度は高く評価されるべきだと思います。仲間同士の間の、あるいは第三者に対する模範となるような、こうしたふるまいが特徴となっている日本人の社会生活はすばらしいと思いました。

同様にどこへ行っても、またどの町に行っても衛生的で清潔なものにはびっくりさせられ感動しました。地域住民の皆さんの努力のおかげで、町は清潔に保たれています。このため感染症が大きな被害をもたらすことは稀であることがよくわかりました。私の国はここのように清潔ではないので感染症の被害から逃れることができません。

素晴らしい発展を遂げたにもかかわらず、日本は伝統や文化は大事にされています。どこの職場でもよく手入れされ清潔な服を着た人達が働いています。また歩行者も自転車も自動車も交通規則を厳守しているのおかげで、東京のような人の多い所でも交通事故の発生が抑えられているのだと思いました。

まだ日本人の人口に占める失業者の割合は低いと思います。これは日本人が勇気を持って何とか対処しようとしているのと、特に全員が学校教育を受けているからだだと思います。それに引き換え私の国では失業の問題は深刻化する一方です。というのも国民の半分は学校に行けません。こうしたことが不良や泥棒の増加の原因になっていると思います。

---

## ◆中南米/チリ

---

### 地球の反対側へ旅して

カリナ アーリアス デイアス

(社会福祉(障害者福祉)グループ)

まさか行くとは思ってもいなかった国に選ばれて訪れることになった喜びで、この旅行は本当に楽しみだった。まずは寿司、お箸から日本の文化に馴染んでいった。

しかしながら言葉の違いは色々悩みの種で、こちらを分かってくれているのかどうかも分からない。

20時間の旅行を経て分かったことは、世界や自然を見る目、実際面での考え方も違うということだった。エピソードは言い尽くせないほどだ。

京都を訪れた時、お寺の水を飲んだり、お線香の煙をかぶったりして健康のため、勉強のため、これからの幸福のために行っているこういう習慣は大事なことなのだと感じた。

合宿セミナーでは家族、教育、労働、障害者に対する社会の対応が各国で違うことや、その類似点を確認できたが、特に日本文化は優れていると思った。日本には責任感というものが根付いている。そのことは、多くの面での私達の疑問を納得させるものだ。

交流会では、私はちょうどこの時誕生日を迎えていたので、このパーティーでもお祝いを受けたが、25年目にして「二人羽織」という何ともユニークなゲームで祝ってもらった。自分の国から遠く離れた場所で誕生祝いを受けたことは、これから自分が学習し、驚き、そして成長するという人生のきっと良い出発になったと思う。

またここでホームステイのご家族にお礼申し上げたい。本当に「友愛に距離はない」という言葉を実感する。

社会福祉問題に関しては、日本政府がこの問題を「障害」と捉えず、「制限された」と表現するのは非常に意義のあることだ。私自身もソーシャルワーカーとしてどう対応していくべきかを学んだ。日本がここまで進んでいる背景には、持てる先端技術や資金力に恵まれていたことも大きいと思うが、しかし政府が優れているのはノルマを設け、違反金を取ってまで障害者の雇用に尽力していることだ。そして企業は障害者自身が決定し自己能力開発することを促しながら援助しサービスを提供している。中南米では、それはまだ未聞のことだ。

中南米諸国では、技術がなく資金繰りに悩み、活動が制限されたものになっている。そのなかで私達は、仕事の内容を少しでも良くしよう、情報を集めよう、本人はじめ家族へ精神的援助を、といったことに集中している。

日本では街頭や交通機関に様々な障害に配慮した設備が整っているのを見た。公衆衛生が意識され、スペースが設置されていることは、そのまま障害のある人々に社会参加を促すものだ。私達は少なくとも今一人一人が、こういう方向に対応していき、こういう社会を作りたいと望んでいる。これから公的機関との緊密なネットワークを作りながら、私達の仕事が一步一步、継続的な発展につながることを望んでいる。

---

## ◆中南米／トリニダード・トバゴ

---

### 一つの地球、一つの人類、そして一つの心

アクリマ・デニス・アリ

(小中学校教員グループ)

日本は伝統的な文化と現代文化が見事に調和した、豊かな文化を持つ国である。しかし、日本滞在を通じて心に残ったのは、温かい心を持ち創造的で几帳面な日本人の姿である。ホームステイ体験はこれを実証し、私たちは真の家族として受け入れられた。合宿セミナーでは、各国の教育システムや課題について学び、生涯の友を得ることができた。また、変容する社会に教育が対処しなければならないことや、教育の質を向上させるために安全で良好な学校環境の維持が不可欠であることも学んだ。施設見学では、生涯教育の促進や、教育現場でのテクノロジーの利用、環境学習、そして障害者を社会の一員として教育するといった優れた方策を学んだ。これらは自国でもぜひ実践したいと思っている。

平和を希求する日本の姿勢は誰もが見習うべきものであり、青年招へい事業はその大きな役割を担っ

ていると確信している。「皆で集い、成し遂げよう、一つの心で。」これからもこの言葉と共に生きていきたい。

---

## ◆中近東／サウジアラビア

---

### 青年招へい事業に参加して

サーミ・アルワベル

(技術教育グループ)

青年招へい事業に参加して滞在した日本での体験は、本当に素晴らしいものだった。日本人々、文化、社会、教育について多くを学んだ。行く先々で日本人々と友情を育むことができた。サウジアラビアと日本は距離も離れているし文化も全く異なるが、それが日本から物事を学ぶうえで障害になることはなかった。日本には長い文明の歴史があり、現代の日本は先端技術で世界の先頭を走っている。世界の全ての国が日本社会から学ぶことがあるだろう。私個人としては、日本の新しい教え方を学ぶことができて、教師としてたいへん有益だったと思っている。また、帰国後は日本の文化を家族に話して聞かせたいと思う。私たちの日本での体験は、必ずやサウジアラビアの発展に寄与するものと信じている。最後に、このような貴重な機会を与えてくれたJICAに感謝したい。

## 2. 合宿セミナー参加日本青年の声

---

### 合宿セミナーを終えて

小林 佳朗

(高校教師：パプアニューギニア、教育(小中学校教育)グループ)

3日間で私が感じたいくつかのことを率直に書こうと思います。

1日目に新宿の京王プラザホテルで集合した時には仕事の都合などでバスに乗車する日本青年が来日青年に比べてかなり少なく、はるばる来てくれたのに申し訳なく、さらにはこれで交流ができるのだろうかと不安に思いました。でもバスの中に入りカラオケを歌い始めると、日本人とパプアニューギニア人とか人数の差とかは関係なく一つの集団、仲間なんだという気持ちに変わりました。英語の歌を何曲も歌っているうちに何だか自分が流暢に英語を話せるような錯覚に陥りました。

横須賀市立小学校の体育館に着き、行われたスポーツ交流では、コーディネーターの方や通訳の方にも協力をしていただきました。その時はちょうど地元の小学生も飛び入りで参加をしてくれて、和やかな雰囲気の中でいい汗をかけました。

2日目の意見交換会では、主に日本とパプアニューギニアの学校教育について話し合いをしました。私のグループは午前中に早めに討議を終わらせて、午後には発表形態を考えながら、さらにまとめていくことにしました。寸劇をすることに決まり演技を始めると、パプアニューギニアの青年には役者が揃っていてどんどんアドリブが入って劇が膨らんでいって、あっという間に3時間が過ぎてしまいました。英語と日本語で同じ内容の台詞(せりふ)を言うかたちをとったのですが、最初の演技なのになぜか日本語が通じているのがおかしく不思議な感じでした。

夜の交流会では日本、パプアニューギニアともにダンスをしました。どちらのダンスにも両国の青年が交じり合って踊りました。その中に入って踊り興奮している自分が愉快でした。会が終わった後もギターのまわりに何人もが集まり歌いました。いつの間にかパプアニューギニアの青年の着る背中に「祭」と入ったハッピーに違和感がなくなって、誰が日本人でだれがパプアニューギニア人なのかはどうでもいいようになっていました。

人数の差や見た目や言葉の違いを気にしていた自分が、今回の交流を通じて大きく変わることができました。このような国を越えて交流をした経験はセミナーが終わっても一生残るものだと信じています。

---

### 多くを学んだ文化交流

松川 恭子

(学生：インド、農業グループ)

他国を先入観でとらえがちであった。途上国というとマイナスイメージが先行してしまう。しかし、インド青年との交流を通して認識が変わった。彼らは陽気で、多様性を尊重し他者を快く受け入れる懐深い者たちであったのだ。

また、途上国と日本との関係、それは、提供される側と提供される側という一方通行の関係のような気がしていたが、そうではなかった。意見交換をした際、日本が抱える問題の所存を客観的にとらえ、見えていなかった点を指摘してくれたのだ。異文化を通して自国を知る。相互作用のもとで関係が成り立つのだと分かった。意見交換の上で、価値観の違いを感じるがあったが、彼らがインドという多様性の中、他者に寛容であるように、私も違いを意識し、価値観を押しつけることのないようにしなければと思っ

た。

今回のセミナーを通して異文化に対する自分の認識を改めることができ、本当に参加して良かったと感じる限りである。

---

## 中国との合宿セミナーに参加して

大瀬 慶子

(公務員：中華人民共和国、環境グループ)

初めての体験だったため、不安な思いでいっぱいでしたが、来日された皆さんが友好的だったので、楽しく交流することができ、新しい世界が広がったように感じました。

私が参加した分科会では「家族」をテーマに話し合いました。私たちが今、日本で抱えている少子高齢化や結婚についての問題と同じようなことが、中国でも社会問題になっているとわかり、共感することが多かったです。また、中国の文化について教えてもらい、今までわからなかったことが納得できました。メディアを通じて語られることだけでなく、現実の状況を直接聞くことができ、大変勉強になりました。

短い時間でしたが、とても充実したときを過ごすことができました。これからも、交流を続けていけたらいいなと思います。

---

## 交流の大切さー新しい世界への広がりー

野村 友彦

(公務員：中華人民共和国、教育グループ)

山中湖畔で過ごした2泊3日は、私にとって貴重な体験となりました。

子どもたちの教育について、現状を情報交換できたことは大きな収穫でありました。中国においても、「知識・理解」を重視する方向から、考える力や表現する力の育成に重きを置き、教育改革が着々と進んでいる様子をつかみ、日本と同じ方向であることを知りました。その教育改革について、力強く自信をもって語る中国人の教師の姿に、大変勇気づけられました。子どもの教育について夢と希望をもって日々の仕事に従事している姿が目につかぶようでした。

今一つ学んだのは、「コミュニケーション能力」の大切さです。積極的に人々とかかわる力は、確実に自分の世界を広くしていきます。この合宿セミナーに参加できたことにより、私の世界もまた広くなりました。子どもたちにも、様々な交流の機会を用意していくことの大切さを感じました。本当にありがとうございました。

---

## 中国の日本語教師と出会って

小椋山 恵

(JOCV日本語学校教師：中華人民共和国、JOCV日本語教師グループ)

河口湖に臨むホテルで、中国日本語青年教師の皆さんとの3日間の合宿セミナーでした。日本語を通じて中国と日本との架け橋の仕事をしている初来日の青年たちです。

参加しようと思ったきっかけは、日本語を外国語として学習し、中国で日本語教師をしている皆さん

に、ぜひ尋ねてみたいことがあったからです。

私自身も日本語教師として働いていますが、日本人の私にとって、母語である日本語を客観的な目で見ることは非常に難しいことです。中国で日本語を学ぶ学生はどんな点を難しいと感じているのか、どのように説明されれば分かりやすいのか、普段から疑問に思っていました。

日本語以外は話せない私に、すばらしく流暢な日本語で（さすがは日本語教師）、分かりやすくアドバイスしてくれた中国青年教師の皆さんにとっても感謝しています。

もちろん、この3日間仕事の話ばかりしていたわけではなく、ボウリングやパーティーを通し、本当に色々な話がありました。みんなで部屋に集まった時などには、どこからともなく恋愛話が飛び出したりして、「国は違っても、好きな話題は同じだなあ…」としみじみ感じたりもしました。

最終日には、ずっと天気が悪くて見ることのできなかつた富士山が顔を出し、それをとても喜んでいた中国日本語青年教師の皆さんの姿が印象的でした。

---

## アフガニスタン、真実は…

服部 麻子

(大学院生：アフガニスタン、公務員(地域開発)グループ)

「私達の国は、日本人の皆さんが思っているほど、危ない所ではありません」交流合宿閉会式、アフガン代表者挨拶のコトバ。アフガン人の使う3つの言語+英語+日本語。5つの言葉が飛び交った3日間。豆まき、綱引き、恵方巻作り、バレーボール、ディスカッション→日本の戦後復興について、平和について、生きていく上で大切なものについて…。些細なことでも途端に白熱、皆で踊って笑って、本当に楽しかった。23歳の私と歳が近い人達も、自分達の国の未来について真剣に考えていた。別れ際、「アフガンに来たら連絡してください」、と開発復興省勤務の女性を書いてくれたのは、アフガンでの彼女の携帯電話の番号。本当に食うに困っている人は全体の10%、とは聞いていたが…。以来、郵便局のポスターの中にいる、毛布を被ったアフガン難民の少女が私に会うたびに語りかけてくるようになった。「本当のことが知りたいのなら、一度アフガンへいらっしゃい」と…

---

## テレビの向こうの「夢」

久志本 裕子

(学生：アフガニスタン、教員グループ)

アフガニスタンの名はこの2年ですっかり馴染み深くなった。爆撃の対象となった「テロリズムの震源地」として、やっと平和が築かれようとしている今、かわいそうな生徒と先生を助けるべく日本の貢献が求められる地として。けれども繰り返される「アフガニスタン」の語は、その背後の人々の息吹を感じさせてくれることはなかった。

タリバーン政権下のカブールに残り、いつか社会を建てなおす日のために女子教育を続けた女性の先生、禁止されても描きたい絵を隠れて描き続けた美術の先生。危険を乗り越えて今実現に向かう「夢」を語る青年たちは、「かわいそう」なイメージとはかけ離れた力と誇りに満ちていた。

一緒に話し歌い、温泉にまで入って共に楽しんだ私達は、もはやテレビのあちらとこちらの存在ではなく、むくもりを持った個人としてしかお互いを見ることはできないだろう。国名に人の心と夢が吹き込まれる、そんな経験を教育の場にも盛り込んでいきたい。

---

## モンゴルを知り、日本を再発見する

麻生 玲子

(大学生：モンゴル、教員(地方教員)グループ)

今回来日したモンゴル地方教員グループの先生たちは、元気で明るく、これからモンゴルを背負っていく子供たちの教育にとっても熱心な人々でした。この合宿を通して、今まで先入観でしか見えていなかった教育事情の現実を知ることができました。

やはり首都に比べて地方では、教育現場の備品も十分にはないようで、自由行動を共にした時、秋葉原でコピー機を一緒に探したこともありました。日本の教育現場では当たり前すぎて、素通りしてしまうようなことも発見し、日本の教育を外から考えるよい機会でもあったと言えます。

そして、モンゴル語を勉強するととてもよい機会でもありました。部屋にはモンゴル人2人と私1人だったので「誰かがわかってきているだろう」という甘えは効かず、このおかげで、大学4年間勉強した中で一番上達した3日間になったと思います。今後も連絡を取り合って、いつか必ず再会しましょう！

---

## コーカサス青年との合宿セミナーに参加して

岡田 大作

(国家公務員：コーカサス混成、地域振興(中小企業振興)グループ)

「コーカサスってどこだっけ？」合宿セミナーの募集を見て最初に思ったのは、これだった。同時に好奇心が頭をもたげ、参加することを決めた。合宿セミナーのみならず、この手の国際交流事業に参加するのは初めてだった。

「一緒に泊まって、ゲームとかするんだよね」とわかったような気でしたが、実際は、こんなに笑ったのは何年ぶりだろうというくらい楽しかった。それはバカ騒ぎしたとかいうことではなく、予想外のできごとに固定観念を突き破られたことにある。初対面の外国人と、こんなに短期間に、どうしてこんなに仲良くなれるんだろう。それは言葉もろくに通じないからこそ、素の自分をさらけ出すほかなかったからだろう。相手もそうにちがいない。

「こんどはお前がコーカサスへ来いよ」と誘われた。「もちろん」。社交辞令ではなく、本当に行ってみたいと思う。もはや友達の住んでいる場所だから。

---

## 私、少し成長しました。

平山 奈央子

(学生：アセアン混成、環境保全(都市環境)グループ)

私は、滋賀県の大学で地球環境問題について学んでおり、琵琶湖を拠点に多くの環境活動に取り組んでいます。

合宿のメインであるディスカッションの私のグループテーマはゴミ問題でした。各国のゴミの捨て方・収集処理方法を発表し合い、ゴミ問題の現状を知ることができました。また、話し合いの中で招へい青年は、どんなに素晴らしい技術があっても、その国の文化・政治・生活に合ったものでなければならぬことを強く訴えていました。そして、私達はゴミ問題解決のために、自分ができ得る身近なこと

をそれぞれ1つ決め、全員の前で約束しました。グループの雰囲気も良く、内容の詰まった有意義なディスカッションになりました。

また、「交流の夕べ」では、各国の音楽や踊りを体験でき、同時に何カ国も訪れたような気分でした。招へい青年だけでなく、同じ分野に興味をもつ日本人参加者ともつながりができ、私の視野を広げる非常に貴重な体験でした。

---

## 異文化交流は個人の交流から

矢口 由紀子

(学生：中央アジア混成、中高等学校教育(職業教育)グループ)

中央アジア、一見すると日本人である私達にはなじみのない地域のように思われます。今回の合宿セミナーでは、この中央アジアの青年達との交流を通して非常に多くのことを学びました。テレビや新聞からでは知ることのできない中央アジアの国々の実体はもちろん、直接彼らと交流することによって、異文化交流というものを肌で感じる事ができたと思います。言語や文化、宗教の違いを超えて、人は個人として触れ合うことができるのだと実感しました。個人として人と向き合った時、国や文化、宗教などを超えることができるのではないのでしょうか。国や文化にとらわれず、相手を個人として尊重して初めて異文化理解も可能になると思います。

私は将来、社会の教師になりたいと考えています。今回の合宿セミナーで学んだことをぜひ授業で生かしたいと思います。

---

## 合宿セミナーに参加して

藤原 勤也

(社会福祉法人職員：中央アジア混成、社会福祉グループ)

自分と同じ分野の青年が参加するという事で大きな期待と、ロシア語が全くできないという不安とで、やや緊張しながらセミナー当日を迎えた。しかし、満面の笑顔で、時には真剣な顔でたくさん話しかけてもらうことで、緊張はほぐれていった。

印象に残ったのはグループディスカッションだった。児童福祉という漠然としたテーマの中、それぞれの国の現状や課題をもとにディスカッションは進められていった。日本と中央アジアの各国には習慣だけでなく、制度も異なるものが多かったが、最後に共通の認識として挙げたのは問題を抱える子どもに対して「愛をもって接する」ということだった。「愛をもって接する」ことは子どもだけに限らず、すべての人に対して言えることではないだろうか。セミナーは終わったが、中央アジアの青年達とこれからも、友情のある交流を続けていくためにも、私自身、愛のある人間になれるよう努力していきたい。



### 3. ホストファミリーの思い出

---

#### ソーム オークン (ありがとう)

羽持 ちづ子

(茨城県：カンボジア、公務員(公衆衛生)グループ)

12月の寒い日、カンボジア人のパッリーさんがわが家にやって来ました。「サムーイ」彼女が真っ先に覚えた言葉です。2人の子供のいる母子保健専門のドクターは人懐こく、歓迎会に集まった家族や親類の者と一緒に早速台所に立って皆を驚かせました。幼児を抱いて食事をさせ、子供が喜んで食べるのを見て食が細いと心配していた母親がびっくりする等、さすがプロです。カンボジアでは昼には帰宅し家族揃って昼食をとるとか。夕食さえもバラバラで一家団樂の少ない日本の子供達が哀れにも思えます。昨今の不幸な事件は家族愛の欠如に起因するようにも思えるからです。

夜には姉の孫たちがやってきました。折り紙を教えたり、子供はいつも親善大使です。

わが家の家族も久々に全員集合し絆が深まりました。異国の風と笑いを運んで来てくれたパッリーさん、集まってくれた人達、そしてこのような機会を与えてくれた関係機関の方々に感謝します。「ソーム オークン」。

---

#### またんメンソーレ (またいらっしゃい) !

新田 マリ子

(沖縄県：インド、農業グループ)

インドといえばカレーの本場くらいの認識しかなく、あまり馴染みがない国だった。しかし、釈迦やガンジーを生んだ広大で国際社会に大きな影響力を持つ国であるとわかった。

私がホストを務めた青年は、首都デリーから遠く離れたミャンマー国境の小さな町からやって来た。名前の発音が難しく「シユアさん」と呼んだ。彼は気さくで話好きで「自分はクリスチャンだが教会にもあまり行かず、お祈りもしないので妻によく叱られる」「たばこは体に悪いというのは医学的に立証されていない」と話して、うまそうに一服していた。食事の好き嫌いもなく、何でも食べた。那覇の公設市場では生きているカニに興味を持ち、その場で調理してもらい、おいしそうに食べていたハッピーな顔が忘れられない。

さよならパーティーでは彼が荒城の月と沖縄民謡を歌い、私がそれに合わせて踊り、大喝采を受け幸せな気持ちになった。これからも国際交流のお手伝いを続けていきたい。

---

#### これからの日本と中国との友好のために

野上 記子

(徳島県：中華人民共和国、環境グループ)

♪No.1にならなくてもいい もともと特別なOnly One♪

SMAPの“世界に1つだけの花”を何度歌ったことだろう。徳島へ来る前の合宿セミナーで聞いて、気に入ったらしい。

胡元元。環境グループの秘書長である彼女は日本語を話せる。大連の外国語学院では、茶道を習って

いたという。彼女は遼寧省の渉外事務局に勤め、主に日本との友好のための仕事をしていると言った。

日本と中国、近いのに、きっと大昔はつながっていたのに、今は分からないことが多い。

元元は子どもに中国での約束の時の合図を覚えてくれた。日本でいう「指きりげんまん」だろうか。約束した。「中国へ行くよ」って。「また会おうね」って。

元元に“世界に1つだけの花”のCDと歌詞を渡した。今頃、練習しているのかもしれない。いつか中国で“世界に1つだけの花”をいっしょに歌おう。

---

## 我が家に娘がひとり増えました

玉城 浩次・春美

(沖縄県：アフガニスタン、公務員(地域開発)グループ)

家族全員一致でマルディアを受け入れた私達は、沖縄のすべてを見聞させてあげようと計画を立てていたが、彼女は我が家がとても気に入ったのか、レッツゴーとさそっても座ったまま。そこでダリー語、英語、日本語での会話で互いのことを知り合うこと4時間余り。

アフガンでは、男性が台所に立つことなど全くないとのことで、主人が、かいがいしく世話をすると大変おどろいていた。アフガンは貧しく生活も大変だという認識だけが頭にあったが、公務員ということで、想像していたより生活レベルは良いように思った。しかし、戦争は絶対にいけないということ、文字にしながらの会話で話し合い、心の底からアフガニスタンの復興を願わずにはおれませんでした。マルディアは最後にはスカーフをはずして写真を写すほどに我が家の一員となっていました。娘が1人増えた私達は、このまま生活できたらと思わずにはいられませんでした。将来はシニアボランティアとして行ってみたい。

---

## 心と心のコミュニケーション

増田 華与

(大阪府：コーカサス混成、保健衛生(母子保健)グループ)

ナイリヤは、まだ日本が寒い2月初旬我が家に来た暖かい風のように、あ〜と言う間に3日間過ぎました。

最初にアゼルバイジャンの地理位置もはっきりせず、家族みんなで調べました。初対面の時の一番の驚きは、お互い共通言語を持たないことです。家へ帰ったら、子供達と抱き合い、会話集を片手に単語を探しながら必死に手ぶり身ぶりで家中を紹介して、楽しく夕食もできました。

次の日、ナイリヤがとても行きたがった京都を訪問しました。金閣寺や清水寺など、特に着物ショー、織り物実演など感激の連続です。私に抱擁して何度も何度も“ありがとう”と言っていたようです。何となくお互い何を言いたいのかがわかってきてしまいますね。本当に言葉なんて怖くない！人間同士はふれあうこと、お互い理解し合うことが一番大切だと痛感しました。

別れる時、お互いが涙をおさえて何度も抱き合って再会の約束をしたことが、本当に忘れられないです。

ナイリヤと出会ったこと、そして皆さまからチャンスをいただいて恵まれたことを心から感謝いたします。

---

## シロミさんが教えてくれたこと

名苗 顕治

(北海道：スリランカ、理数科教員グループ)

持参してきたたくさんの写真の中から「ビューティフル スクール」と言いながら見せてくれた1枚。そこにはシロミさんが働いている小学校が写っていました。その校舎は日本の援助によって建てられたのだと説明してくれました。生徒が使っている机やイスの一部もそうだとのこと。説明する彼女の感謝の気持ちが伝わってきて、とても嬉しく感じました。

2日目の夜、友人2家族に来てもらい、計12名で食事をしました。彼女はお祭りの時に踊るというダンスを披露してくれました。ダンスの上手なことはもちろんのこと、わざわざテープや美しい衣装を準備してくれてくれたその気遣いに、私達は感謝と感動の気持ちで一杯になりました。我が家がホームステイを引き受けたのは2回目でしたが、今回も強く感じたのは、日本と比較して決して豊かとは言えない国に暮らす彼女・彼らの志の高さです。私達も日々きちんと生きていかなければならないと、改めて考えさせられました。

---

## たくさんの刺激をありがとう！

窪谷 多津江

(愛知県：アセアン混成、教育(行政官)グループ)

英語の得意でないわが家ですが、タイの女性を3日間、受け入れさせていただきました。わが家は3回目の受け入れですが、前の2回は日本語のできる方でしたので苦勞しませんでした。主人と私と頼みの綱の中学2年の長男の3人で、辞書を片手に単語を並べての会話でしたが、案外通じるので驚きました。毎回感じるのは、みんなとても積極的で多くのことを吸収していく優秀な人ばかりということです。期間中は一緒にジャズダンスレッスンに行ったりもしましたが、年も近い女性だったのでお友達と出掛けるようでとても楽しかったです。また、近くの名所を、小学生以来に訪ねてみました。途中の古い民家を見て「これはホテル？ レストラン？」と尋ねられたりして見慣れた景色が素敵に見えました。名所の神社も「きれいですね」と熱心に写真を撮る姿に日本の良さも教えられました。

短い間でしたが、お別れはお互いに思わず涙してしまいました。ありがとう！

## 4. 実施協力団体の所感

---

### 心の触れ合いは言葉の壁を超える

飯村 勝輝

(茨城県外国青年招へい事業実行委員会：カンボジア、公務員(公衆衛生)グループ)

今回、茨城を訪れたカンボジアの青年たちは、私たちの心に深く強い印象を残してくれました。

母子保健の研修の一環として、桂村保育所を訪ねた時のことです。突然訪れた見知らぬ外国人の一行に、子供たちは様々な反応を見せました。喜んで駆け寄る子供もあれば、不安そうに母親にしがみつく子、しまいには泣き出す子供も。その時、1人の青年が泣いている子供に近寄り、優しく抱き上げてあやし始めました。すると子供はみるみる泣きやみ、嬉しそうに笑顔を見せたのです。その場の雰囲気がいっぺんに和らぎました。国は違っても、言葉は通じなくても、心の触れ合いによって理解し合えることが実感された一瞬でした。

私たち茨城県外国青年招へい事業実行委員会では、公衆衛生を専門とするカンボジアの青年たちにとってどのようなプログラムを用意したらよいか、何度も議論を重ねました。カンボジアの将来にとって何が役立つのか、茨城にある資源をどう活用するか、都内プログラムとどう調整するか。その結果、テーマを「次世代を担う子供たちを健康に育てる」に設定し、母子保健と感染症を中心とした研修プログラムを組み立てました。関係機関の協力を得て、視察場所を選定し、帰国後も活用してもらえるようにカンボジア語に翻訳した資料は80ページにも及びました。

今、振り返って思うことは、私たちが提供した研修プログラムが幾分かでも青年たち、ひいてはカンボジアの国家建設に役立ってほしいということです。カンボジアの子供たちが健やかに成長できる社会をつくって欲しい。いつの日かカンボジアの子供たちの笑顔を見ることを楽しみにしています。カンボジアの未来に光あれ！

---

### 新たな成果として

嶋田 岳寿

(社)青年海外協力協会：インド、農業グループ)

今回は、これまでの含宿セミナーでマンネリ化していたプログラムの内容を若干修正し、新たな試みとして実施をした。

変更点は、プログラムの流れ(進行)、個々の課題の内容である。

プログラムの進行については、個々の課題を置き換えることにより流れが大分スムーズになった。また、課題の内容について大きく変更をしたのはワークショップで、開発教育の教材等を参考にいくつかの素材を用意した。これは、異文化理解、国際理解という観点からはもちろん、コミュニケーションを図るうえでも大いに効果を発揮した。グループディスカッションでは、話し合いの要点と各々がそこからどのようなことを学んだのかをまとめてもらったが、各グループとも話し合いの内容を改めて整理することができ、全体の発表もスムーズに進められた。

全体としては、来日青年、日本青年とも非常に協力的かつ積極的に交流を図っていた。総じて効果的なプログラムの実施ができ、新たな成果を見出したと実感している。

---

## 同じひとりの青年だった

徳川 和也

((財)沖縄県国際交流・人材育成財団：インド、農業グループ)

受入青年の来日前、準備段階で得た情報は頭痛の種となるものも少なくなかった。「本国では高い地位に就き、プライドや知的好奇心が非常に高く、マイペースを貫く者が多い」。不安を抱えて出席した開講式では、いかめしい顔の青年一行が前評判どおりの質問攻勢。しかし、ひとしきり質問を終えると青年が次々と歩み寄り、笑顔で握手を交わしてくれた。すると心も軽くなり、一方で気が引き締まった。

さて、沖縄へやってきた彼らは、思いのほか陽気で楽しげに毎日を過ごした。特に沖縄の海の美しさに魅了されたようで、途中で立ち寄ったビーチで子供のようにはしゃぐ姿が印象的だった。あっという間に迎えた最終日、青年のひとりがポツリと一言。「厳格と聞かされた日本人とうまくやれるか、心配だったんだ。でも、皆温かくて優しかった。最高だったよ」。最後に気付かされた。彼らもまた、初めて接する民族との出会いに期待と不安を抱いた同世代の一青年だったのだ。

---

## 無題

野上 芳幸

(徳島県青年海外派遣の会：中華人民共和国、環境グループ)

徳島県でのプログラムで“藍染め”を行った。

徳島県では阿波藍とよばれ、いまでも県内で藍農家があり、藍を作っている。徳島では江戸時代、非常に藍文化が発達した。徳島県の伝統文化の体験だ。

まず、自分が作ってみたい柄を考える。模様をつけるには様々な道具を選ばなくてはならない。輪ゴム、フィルムケース、洗濯バサミ、茶こし等。そして藍ガメの中につける。途中、空気にふれさせたりしながら、何度か藍ガメにつける。

作業中はドキドキだ。期待と不安がまじった顔。でも染め上がってハンカチを広げた時、満面の笑みになる。22人のメンバー誰一人同じ柄にはならない。オリジナルハンカチだ。それぞれアイロンをかける時には、愛しさがあふれ出ている。

ものを買うだけでなく、自分で作ってみること、徳島の文化・藍染めは大切なことを教えてくれた。

---

## 中国から環境グループを受け入れて

波光 公仁

((財)日本ユースホステル協会：中華人民共和国、環境グループ)

今回のプログラム作成に当たり、日本の行政や企業の環境問題への取組み、ハイブリッド車・燃料電池車の現状、産業廃棄物・下水処理場など、日本の環境問題の現状を包み隠さず知ってもらおうという考えでプログラムを作成した。

実際受入れをしてみて、参加者の環境問題への取組みや意識が予想以上に高く、各訪問先でゴミや下水処理に関する技術的な事柄を深く質問する姿勢には驚いた。しかし、逆に参加者が驚いていたことは、日本人一般生活者の環境意識の高さであった。今回の参加者は、環境行政に携わる者が多く、中国では行政レベルでは問題意識が高い面もあるが、一般生活者が自らゴミの分別を行ったり、環境問題に心が

けているといったことはまだまだ少ないようだ。

しかし今回、中国人は概して柔軟性があり吸収力が強く、中国が環境問題においても先進国並みになるのは、遠くない日に実現するだろうと感じた。

---

## ニイハオ朋友

浜田 隆子

((社)勤労厚生協会：中華人民共和国、教育グループ)

教育に携わる中国青年の方々に、日本における教育の現状を理解していただくために、教育現場の視察及びそこに関わる教育者との意見交換などを実施した。特に、中国の生徒が多数在籍している横浜市立元街小学校での、中国青年による堂々たる実践授業は、国際理解教育の一環として、全校で行われ、生徒達は、貴重な体験をすることができた。さらに、教師、職員との意見交換会では、低、中、高学年に分かれ、それぞれの立場から、熱意ある討論が交わされた。また、全校集会では、生徒達による歓迎の獅子舞や中国青年とのゲームなど交流を行い、たのしい一時を過ごした。1日かけての訪問であったが、生徒達は、朋友のごとく接し、別れを惜しんでいた。この生徒達が将来、日中両国の懸け橋となり、友好関係がさらに深まることを期待している。

---

## 中国各地の日本語の先生方をご案内して

村瀬 広

((社)国際善隣協会：中華人民共和国、JOCV日本語教師グループ)

今回の青年は、JICAが派遣した日本語教師を受け入れている中国側の学校で日本人教師と共に教えている中国人の日本語教師です。日本語レベルも高く、日本についての知識も既に相当高い人達ですが、日本は初めてという青年達です。

言語は異文化理解の力です。中国での日本の理解者をはぐくむ第一線の方達です。

高校は英語主流ですが、多くの大学、一部の高校での日本語人気は健在のようです。

交流基金の浦和日本語センター、ICU、伊奈学園、日本語教師養成校の授業現場をはじめ、歌舞伎、工場見学、そして家庭や街歩きも興味深々だったようです。

チンエンカン（親眼看）＝この眼で見ました、チンアルティン（親耳聴）＝この耳で聞きました、の中国語の通りの経験だったと思います。どうか帰国後は諸情報を通じ更に豊かにしてください。理解の上に健全な友好が築かれるのを願っています。

富士山麓合宿セミナーでは、日本側は日本語教師が参加の主力で、日本語教育につき交流しました。あきらめかけていた富士山が3日目に美しく見られたのは我々もホッと、喜びました。

---

## 無 題

NPO法人沖縄平和協力センター

(NPO法人沖縄平和協力センター：アフガニスタン、公務員(地域開発)グループ)

今後の国づくりを担う青年たちの視野を広げるのに役立つよう、様々な切り口から地域開発を考え、理解を深められるよう工夫した。どの分野にも共通した、地域の強み・資源を発掘していく必要性、目

的達成に向けて地域の人材を育成・活用していくことの重要性など普遍性を持ったメッセージを伝えることができたと思う。中でも、持続可能な観光を考える講義に関しては、環境教育という視点を含めたコンセプトがアフガン青年にどれほど理解されるのが不安だった。しかし、古く豊かな歴史を持つアフガニスタンにある多くの「資源」を活かしつつ、自然保護を考えながら観光開発に取り組んでいきたいという青年のコメントを聞き、メッセージが伝わったことを実感した。また、「参加型」をキーワードに、青年たち自らが体験する機会を設けたり、ボランティアを交えた研修を実施することで、「地域」に根ざした取り組みの重要性をより身近に感じてもらう工夫ができた。

---

## 無 題

中山 淳

(学校法人広島YMCA学園：アフガニスタン、教員グループ)

この事業の受け入れ希望提案書を提出したのが昨年8月半ばでした。広島YMCAではアフガニスタンの隣国、パキスタンのラホールYMCAを通してアフガニスタンの難民支援を行っており、そのための募金活動もしていました。学校を建設し教育を行うためです。今回受け入れたアフガニスタンの方には、どうしても広島へ来ていただきたいという、強い希望がありました。幸いにも教育関係者の招へいが決まり、プログラム作成を始めましたが、私たちにはアフガニスタンの情報があまりなく多くの苦労がありました。特に生活面、食事については気配りをしたつもりです。

訪問先の1つに平和資料館がありました。青年の1人は、ある写真の前で涙をぼろぼろ流しながらその写真を見ていました。あとで聞いた話ですが、その青年の家族は、アメリカの空爆によりカブールにいる家族をすべて失ったそうです。原爆で建物だけでなく人間や人の心までも破壊され、それがカブールの街と重なって見えたに違いありません。

青年達は、広島の復興をみて驚いていました。またその背景には平和と教育が欠かせないことを今回の研修で学んだと確信しています。

---

## 馬も喜ぶ

原 健司

((社)青少年育成国民会議：モンゴル、教員(地方教員)グループ)

朝から青年達はそわそわしている。通訳のモンゴル人男性も何故か今日は黒い皮のスボン姿である。そう、今日は東京都内にある障害児教育をしている団体の視察訪問だ。ポニーの世話や乗馬、子ども同士、スタッフとの交流を通じて、健康児や障害児に豊かな人格形成を図ることを目的として活動している。その担当者の計らいでポニーに乗るチャンスがやってきた。「10年以上も乗っていないので無理です。やめておきます」と口々に言っていた青年達の目付きが変わり、我こそはと先を争い乗りだした。どの青年達も片手で手綱を引き足で蹴り上げ、とても素人には思えないほど見事にポニーを操り、もうそこはモンゴルの大草原となった。日本人が車や自転車に乗るように、彼らの身体には乗馬の感覚があるのだろう。この先50年経ってもこんなモンゴル青年に出逢えるのだろうか。

---

## 目的達成

藤井 晴敏

((財)大阪ユースホステル協会：コーカサス混成、保健衛生(母子保健)グループ)

今回の青年達の真剣さには驚かされた。講義中、講師の一語一語を聞き漏らさないよう集中して講義に取り組んでいた。質問タイムでは毎回、空白がないくらい質問が出た。質問の内容も自国の環境とどのように違うのか、帰国して生かせることは何かを確かめるものが多かった。視察先では青年達が自ら積極的にリクエストすることがあり、プログラムも柔軟に変更していくことが多かった。

そんな真剣さの合間に、子供達と接する時の青年達の笑顔はとても優しく、講義中の時とは全く別の顔を見ることができた。

今現在、日本と彼らの国々では経済的な状況の違いにより、設備面で大きな違いがある。しかし環境の違いに落胆することよりも、自国の代表という責任感から、日本でより多くのものを学んで帰りたいという姿勢を見れたことは、プログラムをコーディネートした者として目的を達成できたという喜びでいっぱいである。

---

## 「人」を育てる教育

前田 康吉

((社)滝川市国際交流協会：スリランカ、理数科教員グループ)

スリランカのみな様を受け入れるに当たり、幼稚園から高校までを見てもらうことで、「教育とは？」ということ学んでもらえればと、プログラムを組み立てた。実際、彼らの姿を見て驚いたことは、貪欲なまでの向上心である。どの場面でも非常に真剣で、研修を行っている側が感心するような意見を述べることもあった。また交流の場面では、とても明るく、人なつっこい彼らの性格が関係者に親近感を与えていた。これほど陽気な彼らだが、国内紛争が落ち着いたのはつい最近である。

関わってくれた人々の心の温かさを感じ、「人」と「人」の触れ合いの大切さをこのプログラムを通じて実感してくれたのではないかと思う。「人」は「人」に助けられており、その「人」を育てるのが教育の原点であるということを彼らは感じ取ってくれたに違いない。そして、民族や宗教などの違いを超えて、今後のスリランカ発展を担う人材の育成に役立ててくれると信じている。

---

## 忘れられない授業

塚越 賢一

((社)勤労厚生協会：アセアン混成、教育(行政官)グループ)

今回の一貫型のアセアン混成(教育/行政官)グループの担当が決まったのは、SARS(新型肺炎)の影響で9月末であった。テーマの幅が広く、参加国が7か国のため、実質的な準備期間は短かった。

アセアンの青年達は好奇心旺盛で、合宿セミナーや各訪問先で活発な質問が相次いだ。

愛知県高浜市立翼(つばさ)小学校でのことである。小学校2学年の「学級レク」授業の際、インドネシアの女性教員は、多少硬くなっている生徒を前に、自国の果物の名前を書き出し、日本でも知られているフルーツの歌の合唱の授業を始めた。『スタンドアップ』全員立ち上がって元気な合唱が始まった時の感動は忘れられない。教育には言葉の壁や国境はないと実感した瞬間だった。



かけがえのない「感動」という無形の「おみやげ」は、関係者すべての人の心に深く残るのではないかと思った。

---

## 中央アジア青年を受け入れて

新居 啓司

((財)国際看護交流協会：中央アジア混成、社会福祉グループ)

当財団としては、青年招へい事業で今回初めて中央アジア諸国の青年を受け入れました。プログラムを作成するにあたり、前年度の評価等を参考に研修内容等を検討しましたが、今年度の方針として、より社会福祉の現場に重点を置き、視察中心の研修とすることにしました。また地方プログラム実施先である北梅道北見市とは、綿密な打ち合わせをとおして、都内は身体障害者福祉、地方は地域福祉政策を主に、都内、地方の連携によりプログラム全体をとおして日本の社会福祉を総合的に学べるよう工夫をしました。

しかしながら、招へい青年のバックグラウンドは様々であり、必ずしもすべての青年の専門をカバーしていませんでしたが、それぞれの青年のプログラムへの積極的な参加により研修、交流とも非常に充実したプログラムとなり、また、実務担当者としても初めての中央アジア諸国受入れで学びの多い、また印象深いグループであったことを付記します。



## 〈資料〉

図表. 平成15年度青年招へい事業 受入実績グラフ

表1. 青年招へい事業 国・地域別／年度別受入実績

表2. 平成15年度青年招へい事業 招へい陣別受入実績

表3. 平成15年度青年招へい事業 国・地域別受入実績

表4. 平成15年度青年招へい事業 地域別・国別・分野別受入実績

表5. 平成15年度青年招へい事業 JICA国内機関／都道府県別受入人数

表6. 平成15年度青年招へい事業 調査団派遣実績

別添1. 青年招へい20周年記念式典報告

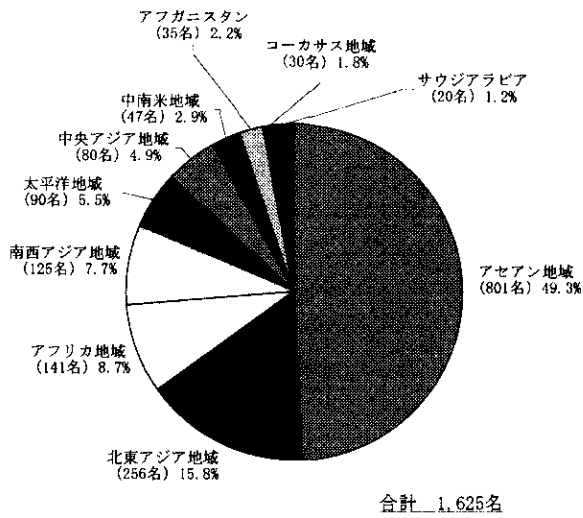
別添2. 青年招へい事業 帰国青年同窓会活動概要（平成15年度）

別添3. 平成15年度事後交流促進調査団派遣報告（要旨）

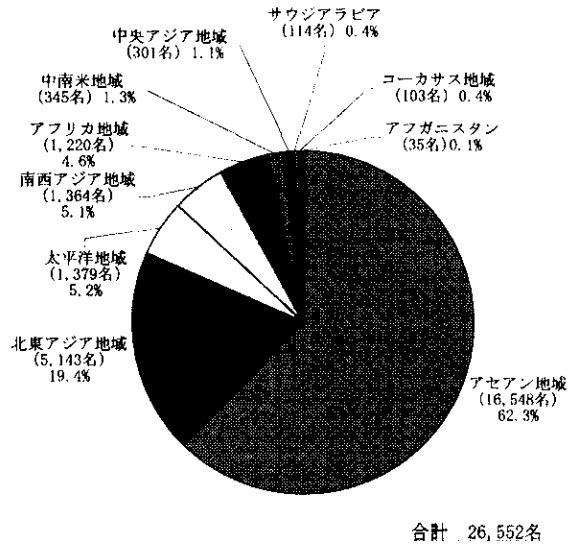


# 図表. 平成15年度青年招へい事業 受入実績グラフ

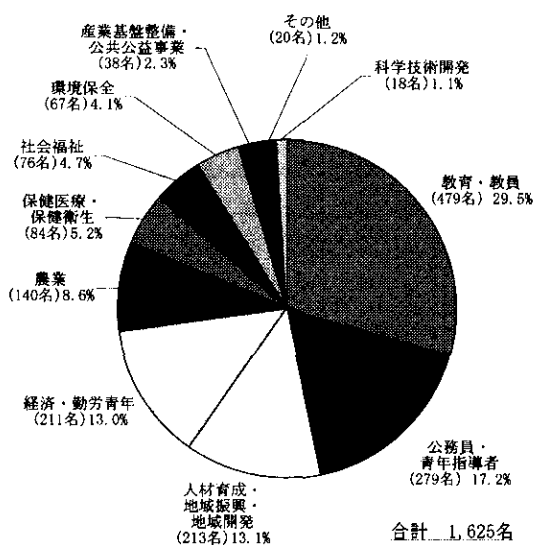
平成15年度青年招へい事業 地域別受入実績



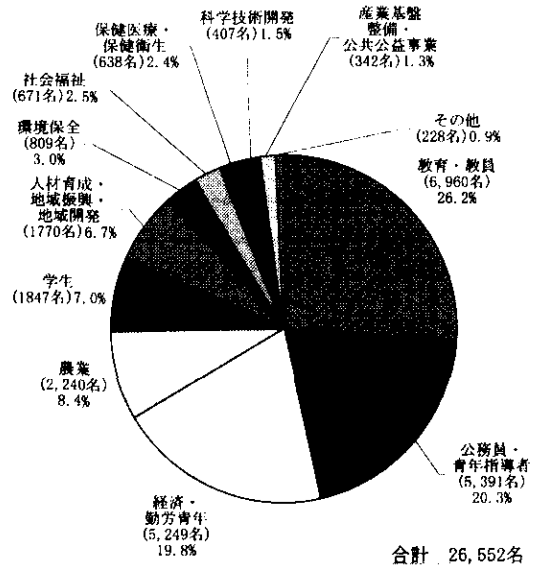
青年招へい事業 地域別受入 累計実績 (昭和59年度～平成15年度)



平成15年度青年招へい事業 分野別受入実績



青年招へい事業 分野別受入 累計実績 (昭和59年度～平成15年度)



## 日本人ボランティア数

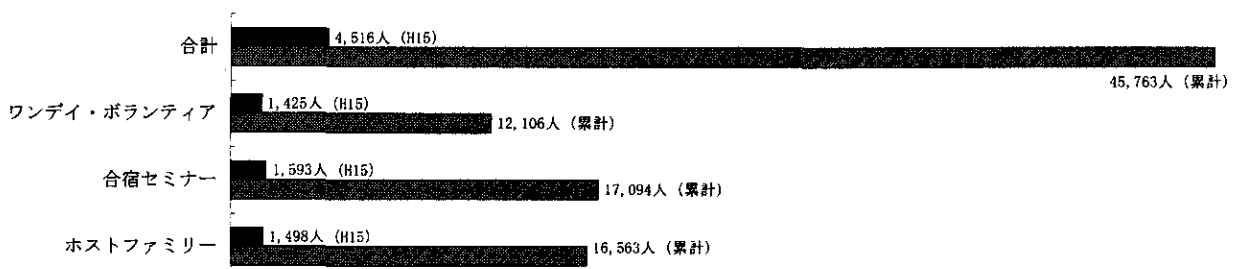


表1. 青年招へい事業 国・地域別／年度別受入実績

国名	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	平成	平成	平成	平成	平成	平成	平成	平成	平成	平成	平成	平成	平成	平成	平成	平成	合計
	59	60	61	62	63	元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15		
ブルネイ	5	30	49	50	60	49	50	43	50	48	49	48	49	48	42	-	-	-	-	-	-	660
カンボジア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	30	30	30	30	30	40	40	40	40	40	310
インドネシア	149	150	150	150	150	149	150	149	147	149	145	150	149	150	148	149	151	147	149	148	2,979	
ラオス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20	18	20	20	34	30	30	30	30	232	
マレーシア	147	148	150	150	150	150	150	150	150	150	150	149	150	150	146	149	153	156	140	148	2,986	
ミャンマー	-	-	10	10	-	-	-	-	-	-	20	20	20	20	20	20	30	30	30	19	249	
フィリピン	149	150	150	150	150	150	149	147	148	149	150	149	150	148	149	150	150	149	147	151	2,985	
シンガポール	149	150	150	150	150	150	150	147	149	149	147	146	149	148	106	-	-	-	-	-	2,190	
タイ	149	150	150	150	150	150	150	150	149	147	150	150	150	150	150	150	150	150	150	145	2,990	
ベトナム	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	98	99	99	100	115	100	100	99	100	910	
東ティモール	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	15	20	20	57	
ASEAN諸国・地域小計	748	778	809	810	800	798	799	786	793	792	811	960	964	963	911	797	806	817	805	801	16,548	
中華人民共和国	-	-	-	100	100	50	199	200	199	197	200	197	200	200	200	320	320	318	300	246	3,546	
大韓民国	-	-	-	100	99	99	100	98	99	96	100	98	100	97	99	100	90	97	-	-	1,472	
モンゴル	-	-	-	-	-	-	-	-	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	15	10	125	
バングラデシュ	-	-	-	-	-	-	-	20	20	20	20	20	20	19	20	20	20	35	29	30	293	
ブータン	-	-	-	-	-	-	-	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	64	
インド	-	-	-	-	-	-	-	30	29	30	13	23	27	24	28	30	30	38	35	25	362	
モルディブ	-	-	-	-	-	-	-	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	65	
ネパール	-	-	-	-	-	-	-	10	9	10	10	10	10	7	10	9	10	15	20	15	145	
パキスタン	-	-	-	-	-	-	-	20	20	20	20	20	20	20	20	20	20	30	30	30	290	
スリランカ	-	-	-	-	-	-	-	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	15	15	15	145	
南西アジア諸国小計	-	-	-	-	-	-	-	100	98	100	83	93	97	90	98	99	99	143	139	125	1,364	
アフリカ諸国	-	-	-	-	-	-	-	-	-	50	100	97	95	95	92	144	136	130	140	141	1,220	
フィジー	-	-	10	10	11	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	13	212	
バブアニューギニア	-	-	10	14	30	34	30	30	30	30	30	30	30	29	29	30	30	30	30	30	506	
その他太平洋諸国・地域	-	-	-	-	45	38	36	32	36	34	38	36	47	47	47	44	46	47	41	47	661	
太平洋諸国・地域小計	-	-	20	24	86	84	78	74	78	76	80	78	89	88	88	86	88	89	83	90	1,379	
中南米諸国	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	50	49	54	50	47	48	47	345	
サウジアラビア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20	20	20	17	17	20	114	
カザフスタン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	5	5	10	19	65	
キルギス	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	5	5	14	29	78	
タジキスタン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	5	3	10	20	63	
トルクメニスタン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	5	5	10	-	24	
ウズベキスタン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	5	6	9	26	71	
中央アジア5カ国	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	25	25	24	63	94	301	
アルメニア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	8	10	10	33	
アゼルバイジャン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	10	10	10	35	
グルジア	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	10	10	10	35	
コーカサス3カ国	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	28	30	30	103	
アフガニスタン	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	35	35
合計	748	778	829	1,034	1,085	1,031	1,176	1,258	1,277	1,321	1,384	1,533	1,555	1,593	1,592	1,655	1,658	1,749	1,671	1,625	26,552	

表2. 平成15年度青年招へい事業 招へい陣別受入実績

陣別	招へい期間(来日から曜日)	国名/地域名	招へい分野	定員	実績	都内実施協力団体	実施県	地方実施協力団体
No.	招へい全体期間、グループ数、人数、募集空港名、共通及び評価7.2の3ヵ所中の宿泊先							
1	5月14日(水)～6月5日(木) 3グループ 72名 成田空港発着 TIC泊	フィリピン	農業 中小企業振興 行政(地方行政)	23 29 20	23 29 20	(社)青年海外協力協会 (社)国際交流サービス協会 (社)勤労厚生協会	愛知 広島 千葉	(社)豊川市国際交流協会 (学)広島YMCA学園 (社)ちば国際コンベンションビューロー
5	6月11日(水)～7月3日(木) 4グループ 89名 関西空港発着 OSIC泊	インドネシア インドネシア インドネシア インドネシア オーストラリア	行政(地方行政) 中小企業振興(食品産業) 教員(中学・高校教員) 公務員(法制度)	23 23 23 20	22 23 23 20	(財)日本ユースホステル協会 (財)愛媛県国際交流協会 (社)青年海外協力協会 (社)勤労厚生協会	山形 愛媛 北海道 愛媛	山形県青年海外協力協会 (社)愛媛県国際交流協会 十勝インターナショナル協会 愛媛県青年海外協力協会
6	6月18日(水)～7月10日(木) 5グループ 90名 関西空港発着 OSIC泊	太平洋混成 太平洋混成 太平洋混成 バブアニューギニア バブアニューギニア	社会開発(小中学校教育) 経済開発 環境保全 教育(小中学校教育) 警官	24 21 15 15 15	24 21 15 15 15	(社)世界青年交流協会 (社)日本経済青年協議会 鋼路市海外青年招へい事業実行委員会 (財)日本国際協力センター (社)国際交流サービス協会	秋田 長野 北海道 山口 徳島	秋田県世界青年友の会 (社)駒ヶ根青年会館 鋼路市海外青年招へい事業実行委員会 (社)山口県国際交流協会 (社)徳島県青年会館
7	6月25日(水)～7月17日(木) 5グループ 108名 関西空港発着 OSIC泊	マレーシア マレーシア マレーシア ミャンマー オーストラリア	教員(中学・高校教員) 農業 中小企業振興 教育(職業訓練(機械)) 技術教育	25 21 22 20 20	24 21 21 19 20	(財)岩手県国際交流協会 (社)青年海外協力協会 (社)青年海外協力協会 (特)群馬県世界青年友の会 (社)青少年育成国民会議	岩手 北海道 北海道 群馬 福岡	(社)岩手県国際交流協会 旭川市国際交流委員会 長崎県世界青年友の会 (特)群馬県世界青年友の会 (社)青少年育成国民会議九州支部
8	7月2日(水)～7月24日(木) 3グループ 78名 成田空港発着 TIC泊	アフリカ混成(仏語圏) アフリカ混成(仏語圏) アフリカ混成(仏語圏)	女性教員 理数科教員 保健衛生(公衆衛生)	26 26 26	24 25 26	(財)世界青年交流協会 (財)日本ユースホステル協会 (社)国際看護交流協会	新潟 岡山	新潟県青年海外協力協会 津山と世界を結ぶ会 (社)国際看護交流協会
10	7月16日(水)～8月7日(木) 4グループ 60名 関西空港発着 OSIC泊	パキスタン パキスタン パキスタン バングラデシュ バングラデシュ	地方行政1 地方行政2 地方行政1 地方行政2	15 15 15 15	15 15 15 15	(社)青年海外協力協会 (財)日本国際協力センター (社)世界青年交流協会 (社)日本経済青年協議会	大阪 福岡 広島 広島	(社)青年海外協力協会近畿支部 (社)福岡県国際交流センター (社)三次国際交流協会 しょうばら国際交流協会
11	7月23日(水)～8月14日(木) 5グループ 112名 関西空港発着 OSIC泊	インドネシア インドネシア インドネシア タイ タイ	農業(畜産) 地域振興 行政(地方行政) 中小企業振興 ジェンダーと開発	23 23 23 23 20	23 23 23 22 20	(社)国際農業者交流協会 (社)勤労厚生協会 日本青年団協議会 (財)日本経済青年協議会 (社)国際交流サービス協会	三重 福島 福井 北海道 奈良	(社)三重県国際交流財団 福島県青年海外派遣友の会 鯖江市国際交流協会 とまこまい国際交流センター 地誌市民フォーラムなら
2	8月27日(水)～9月18日(木) 4グループ 100名 関西空港発着 OSIC泊	中華人民共和国 中華人民共和国 中華人民共和国 中華人民共和国	青年指導者 経済 地域振興 教育	25 25 25 25	25 25 24 25	(社)青少年育成国民会議 (財)ユースワーカー能力開発協会 (社)日本中国友好協会 (財)共立国際交流奨学財団	奈良 鳥取 富山 北海道 奈良	とっとり青年会 (財)とやま国際センター (社)日本中国友好協会 (財)奈良YMCA
4	8月27日(水)～9月18日(木) 2グループ 45名 成田空港発着 YIC泊	ベトナム ベトナム	教育(教育学) 農業(地域開発)	23 22	23 22	(財)世界青年交流協会 (財)ユースワーカー能力開発協会宮崎県支部	岡山 宮崎	(財)岡山県青年館 (財)ユースワーカー能力開発協会宮崎県支部
13	9月3日(水)～9月25日(木) 3グループ 72名 関西空港発着 OSIC泊	アフリカ混成(英語圏) アフリカ混成(英語圏) アフリカ混成(英語圏)	女性教員 理数科教員 保健衛生(公衆衛生)	24 24 24	23 24 22	(財)世界青年交流協会 (財)鹿児島県国際交流協会 (財)日本ユースホステル協会	長野 鹿児島 青森	長野県世界青年友の会 (財)鹿児島県国際交流協会 青森県青年海外協力協会
9	10月1日(水)～10月23日(木) 4グループ 98名 成田空港発着 TIC泊	アセアン混成 アセアン混成 アセアン混成 アセアン混成	科学技術(IT) 公共・公益事業(地方電化) 社会福祉(障害者福祉) 保健衛生(母子保健)	22 20 28 28	22 18 26 28	(財)日本友愛青年協会 (社)国際交流サービス協会 (財)札幌国際プラザ (財)日本ユースホステル協会	北海道 岐阜 北海道 千葉	千歳国際交流協会 岐阜県世界青年友の会 (財)札幌国際プラザ 市川市ユースコ協会
12	10月15日(水)～11月6日(木) 3グループ 60名 関西空港発着 OSIC泊	中華人民共和国 中華人民共和国 中華人民共和国	行政 経済 社会基盤整備	20 20 20	20 20 20	(社)青少年育成国民会議 (財)ユースワーカー能力開発協会 (社)国際看護協会	福井 大阪 群馬	福井県日本中国友好協会 (財)ユースワーカー能力開発協会大阪支所 アジヤ青年招へい事業実行委員会
14	11月5日(水)～11月27日(木) 3グループ 69名 関西空港発着 OSIC泊	タイ タイ タイ	教員(ノンフォーマル) 地域振興(地方産業) 農業	23 23 23	23 23 23	(社)青少年育成国民会議 (財)日本友愛青年協会 (社)国際農業者交流協会	宮城 大分 静岡	(財)仙台YMCA (財)大分県国際交流センター 招徠国際交流協会
15	11月12日(水)～12月4日(木) 2グループ 50名 関西空港発着 OSIC泊	中南米混成 中南米混成	社会福祉(障害者福祉) 小中学校教員	30 20	30 17	(財)世界青年交流協会 (財)海外日系人協会	香川 奈良	(財)香川県国際交流協会 (社)まちづくり国際交流センター
16	11月19日(水)～12月11日(木) 4グループ 70名 関西空港発着 OSIC泊	カンボジア カンボジア インド インド	農業(農村開発) 公務員(公衆衛生) 農業 職業/技術訓練	15 15 20 20	15 15 20 9	(財)日本国際協力センター (財)国際看護交流協会 (社)青年海外協力協会 (社)日本国際生活体験協会	香川 茨城 神岡 静岡	香川県海外派遣友の会 茨城県外国青年招へい事業実行委員会 (財)静岡県国際交流・人材育成財団 (財)静岡県国際交流協会
17	11月26日(水)～12月18日(木) 4グループ 80名 成田空港発着 TIC泊	中華人民共和国 中華人民共和国 中華人民共和国 中華人民共和国	環境 地域振興 教育 TOCV日本語教師	20 20 20 20	22 24 23 20	(財)日本ユースホステル協会 (社)日本中国友好協会 (社)勤労厚生協会 (社)国際看護協会	徳島 鳥取 石川 高知	徳島県青年海外派遣友の会 とっとり青年会 (財)石川県ユースホステル協会 高知県立上穂基金
4	1月14日(水)～2月5日(木) 2グループ 47名 関西空港発着 OSIC泊	マレーシア マレーシア	行政(人的資源開発) 地域振興	25 22	26 22	滋賀県青年団体連合会 日本青年団協議会	滋賀 山口	滋賀県青年団体連合会 日本青年団協議会
18	1月21日(水)～2月11日(木) 3グループ 40名 成田空港発着 TIC泊	モンゴル コーカサス混成 コーカサス混成	教員(地方教員) 地域振興(中小企業振興) 保健衛生(母子保健)	10 15 15	10 15 15	(社)青少年育成国民会議 (社)日本経済青年協議会 (財)日本ユースホステル協会	福島 和歌山 大阪	にほんまつ地球市民の会 海友会 (財)大阪ユースホステル協会
19	1月21日(水)～2月11日(木) 3グループ 40名 関西空港発着 OSIC泊	スリランカ ネパール ブータン/モルディブ	理数科教員 教育における地方分権 教育(初中等教員)	15 15 10	15 15 10	(社)日本国際生活体験協会 (社)勤労厚生協会 (社)青年海外協力協会	北海道 兵庫 愛知	(社)滝川国際交流協会 青川町国際交流協会 (財)愛知県国際交流協会
特	1月26日(月)～2月15日(日) 2グループ 30名 成田空港発着 TIC泊	アフガニスタン アフガニスタン	公務員(地域開発) 教育	15 15	15 20	(社)青年海外協力協会 (社)国際交流サービス協会	沖縄 広島	沖縄平和協力センター (学)広島YMCA学園
3	2月4日(水)～2月26日(木) 3グループ 82名 成田空港発着 TIC泊	アセアン混成 アセアン混成 アセアン混成	教育(行政官) 経済(財政) 環境保全(都市環境)	26 28 28	30 27 30	(社)勤労厚生協会 (社)青少年育成国民会議 (社)国際交流サービス協会	愛知 福岡	(社)勤労厚生協会中部支部 (財)九州・山口経済連合会 (財)京都ユース・ホステル協会
20	3月24日(水)～4月15日(木) 4グループ 100名 成田空港発着 TIC泊	中央アジア混成 中央アジア混成 中央アジア混成 中央アジア混成	マスメディア 中高専学校教育(職業教育) 地域振興 社会福祉	25 25 25 25	25 20 20 25	(社)青年海外協力協会 (財)日本経済青年協議会 (財)北海道YMCA (財)国際看護交流協会	大阪 兵庫 北海道 北海道	大阪府青少年国際交流協議会 川西市国際交流協会 (財)北海道YMCA 北見国際技術協力推進会議
21	3月24日(水)～4月15日(木) 4グループ 88名 関西空港発着 OSIC泊	ベトナム ベトナム フィリピン フィリピン	経済(中小企業振興) 公務員(地域開発) 教員(中学・高校教員) 地域振興	23 22 23 20	23 22 23 20	(財)ユースワーカー能力開発協会 (社)国際交流サービス協会 (社)日本国際生活体験協会 (財)世界青年交流協会	大阪 兵庫 大阪 山口	インターコミュニカ 宝塚市国際交流協会 (社)アジア協会アジア友の会 世界青年徳山友の会
合計		アセアン9カ国(801) 中国(246) 中東27カ国(47) アフリカ42カ国(141) 110カ国・地域	コーカサス3カ国(30) 太平洋諸国・地域14カ国(90)			アフガニスタン(35) モンゴル(10) サウジアラビア(20)		南アジア7カ国(125) 中央アジア4カ国(80)

表3. 平成15年度青年招へい事業 国・地域別受入実績

1. 東南アジア諸国 (9カ国)

①アセアン諸国

国名	混成グループ小計(a)	国別グループ小計(b)	総計
インドネシア	34	114	148
マレーシア	39	109	148
フィリピン	38	113	151
タイ	31	114	145
ベトナム	10	90	100
カンボジア	10	30	40
ミャンマー	0	19	19
ラオス	10	20	30
合計	172	609	781

(a)アセアン混成グループ別実績

国名/分野名	教育 (行政官)	経済 (財政)	環境保全 (都市環境)	科学技術 (IT)	公共・公益事業 (地方電化)	社会福祉 (障害者福祉)	保健衛生 (母子保健)	国別小計
インドネシア	5	4	6	6	5	5	3	34
マレーシア	6	5	7	5	5	6	5	39
フィリピン	5	8	5	5	5	5	5	38
タイ	8	4	6	2	3	4	4	31
ベトナム	2	2	2	-	-	2	2	10
カンボジア	2	2	2	-	-	2	2	10
ミャンマー	-	0	0	0	-	0	0	0
ラオス	2	2	2	-	-	2	2	10
グループ別合計	30	27	30	18	18	26	23	172

(b)国別グループ実績

国名	分野名	小計人数
インドネシア	行政 (地方行政)	
	中小企業振興 (食品産業)	
	教員 (中学・高校教員)	
	農業 (畜産)	
	地域振興	
国別小計	114	
マレーシア	行政 (人的資源開発)	
	地域振興	
	教員 (中学・高校教員)	
	農業	
	中小企業振興	
国別小計	109	
フィリピン	農業	
	中小企業振興	
	行政 (地方行政)	
	教員 (中学・高校教員)	
	地域振興	
国別小計	113	

タイ	行政 (地方行政) 中小企業振興 教員 (ノンフォーマル) 地域振興 (地方産業) 農業	
タイ	国別小計	114
ベトナム	教育 (教育学) 農業 (地域開発) 経済 (中小企業振興) 公務員 (地域開発)	
ベトナム	国別小計	90
カンボジア	農業 (農村開発) 公務員 (公衆衛生)	
カンボジア	国別小計	30
ラオス	公務員 (法制度)	
ラオス	国別小計	20
ミャンマー	教育 (職業訓練 (機械))	
ミャンマー	国別小計	19

②東ティモール

分野名	分野別人数	国別合計
ジェンダーと開発	20	20



2. アフリカ諸国 (48カ国)

①仏語圏グループ (27カ国)

国名/分野名	女性教員	理数科教員	保健衛生 (公衆衛生)	国別合計
アルジェリア	0	0	0	0
アンゴラ	1	-	0	1
カーボヴェルデ	2	-	1	3
ガボン	1	1	-	2
カメルーン	1	1	2	4
ギニア	1	1	1	3
ギニアビサウ	0	-	-	0
コモロ	-	-	-	0
コンゴ共和国	1	1	-	2
コンゴ民主共和国	0	-	1	1
サントメ・プリンシペ	1	-	0	1
ジブチ	0	1	1	2
セネガル	2	3	2	7
チャド	1	1	1	3
チュニジア	2	2	2	6
トーゴ	1	1	1	3
ニジェール	1	3	2	6
ブルキナファソ	1	1	2	4
ブルンジ	2	1	-	3
ベナン	1	1	2	4
マダガスカル	1	1	2	4
マリ	2	1	0	3
モーリタニア	1	1	1	3
モロッコ	0	1	2	3
ルワンダ (注)	0	0	-	0
コートジボワール	1	2	1	4
赤道ギニア	-	1	0	1
中央アフリカ	0	0	0	0
グループ別合計	24	25	24	73

①英語圏グループ (22カ国)

国名/分野名	女性教員	理数科教員	保健衛生 (公衆衛生)	国別合計
ウガンダ	1	0	2	3
エジプト	1	4	1	6
エチオピア	1	1	1	3
エリトリア	2	2	1	5
ガーナ	2	2	1	5
ガンビア	0	0	0	0
ケニア	1	3	3	7
ザンビア	1	1	2	4
シエラレオネ	0	0	1	1
ジンバブエ	2	1	1	4
スワジランド	0	0	1	1
セーシェル	1	1	1	3
タンザニア	3	2	2	7
ナイジェリア	1	1	0	2
ナミビア	1	1	-	2
ボツワナ	1	0	0	1
マラウイ	1	1	2	4
モーリシャス	0	0	-	0
モザンビーク	1	1	3	5
ルワンダ (注)	0	-	-	0
レソト	1	1	-	2
南アフリカ共和国	2	1	0	3
グループ別合計	23	23	22	68

(注) ルワンダは、相手国の要望に基づき英語圏・仏語圏双方での受入。

3. 中南米混成 (32カ国)

国名/分野名	社会福祉 (障害者福祉) (西語)	小中学校教員 (英語)	国別合計
アルゼンチン	1	-	1
アンティグア・バーブーダ	-	1	1
ベネズエラ	1	-	1
ウルグアイ	1	-	1
エクアドル	0	-	0
エルサルバドル	2	-	2
ガイアナ	-	2	2
キューバ	1	-	1
グアテマラ	2	-	2
グレナダ	-	0	0
コスタリカ	1	-	1
コロンビア	3	-	3
ジャマイカ	-	2	2
スリナム	-	1	1
セントルシア	-	2	2
セントビンセント	-	1	1
セントクリストファー・ネーグイス	-	1	1
チリ	1	2	3
ドミニカ共和国	2	-	2
ドミニカ	-	0	0
トリニダード・トバゴ	-	2	2
ニカラグア	2	-	2
ハイチ	-	2	2
パナマ	2	-	2
パラグアイ	2	-	2
バルバドス	-	0	0
ブラジル	0	0	0
ペルー	-	1	1
ペルー	3	-	3
ボリビア	2	-	2
ホンジュラス	2	-	2
メキシコ	2	-	2
グループ別合計	30	17	47

4. 太平洋諸国 (14カ国)

①ババアニューギニア

分野名	分野別人数	国別合計
教育 (小中学校教育)	15	30
警官	15	

②太平洋混成

国名/分野名	社会開発 (小中学校教育)	経済開発	環境保全	国別合計
バヌアツ	2	2	1	5
キリバス	2	1	1	4
クック諸島	1	1	-	2
サモア	2	2	1	5
ソロモン	3	2	2	7
ツバル	1	1	-	2
トンガ	2	2	1	5
ナウル	1	-	1	2
ニウエ	1	1	-	2
パラオ	1	1	1	3
フィジー	5	4	4	13
マーシャル	1	2	1	4
ミクロネシア	2	2	2	6
グループ別合計	24	21	15	60

### 5. 南西アジア（7カ国）

国名	分野名	分野別人数	国別合計
バングラデシュ	地方行政1	15	30
	地方行政2	15	
パキスタン	地方行政1	15	30
	地方行政2	15	
インド	農業	16	25
	職業/技術訓練	9	
スリランカ	理数科教員	15	15
ネパール	教育における地方分権	15	15
ブータン	教育（初中等教員）	10	5
モルディブ			5

### 6. 中央アジア混成（5カ国）

国名/分野名	マスメディア	中高等学校教育 (職業教育)	地域振興	社会福祉	国別合計
ウズベキスタン	5	5	5	5	20
カザフスタン	5	5	5	5	20
キルギス	5	5	5	5	20
タジキスタン	5	5	5	5	20
トルクメニスタン	0	0	0	0	0
グループ別合計	20	20	20	20	80

### 7. コーカサス混成（3カ国）

国名/分野名	地域振興 (中小企業)	保健衛生 (母子保健)	国別合計
アルメニア	5	5	10
アゼルバイジャン	5	5	10
グルジア	5	5	10
グループ別合計	15	15	30

### 8. その他国別

国名	分野名	分野別人数	国別合計
中華人民共和国	青年指導者	23	246
	経済	25	
	地域振興	24	
	教育	25	
	行政	20	
	経済	20	
	社会基盤整備	20	
	環境	22	
	地域振興	24	
	教育	23	
	JOCV日本語教師	20	
	モンゴル	教員（地方教員）	
サウジアラビア	技術教育	20	20
アフガニスタン	公務員（地域開発）	15	35
	教育	20	

表4. 平成15年度青年招へい事業 地域別・国別・分野別受入実績

地域	国名	教育・教員	経済・経営	勤労青年	公務員・行政	青年指導者	人材育成	地域振興・ 地域開発	社会福祉	農業	環境保全	保健医療・ 保健衛生	科学技術開発	学生	産業基盤整備・ 公共公益事業	その他	合計
アセアン	インドネシア	28	27		22			23	5	23	6	3	6		5		148
	マレーシア	30	26		26			20	6	18	7	5	5		5		148
	フィリピン	28	37		18			20	5	23	5	5	5		5		151
	タイ	31	26		23			23	4	23	6	4	2		3		145
	ベトナム	25	25		22				2	22	2	2					100
	ラオス	2	2		20				2		2	2					30
	ミャンマー	19															19
	カンボジア	2	2		15				2	15	2	2					40
	東ティモール							20									20
	小計	165	145		146			106	26	124	30	23	18		18		801
北東アジア	中華人民共和国	68	45		20	23		48			22				20		246
	モンゴル	10															10
	小計	78	45		20	23		48			22				20		256
南西アジア	バングラデシュ				30												30
	ブータン	5															5
	インド	9								16							25
	モルディブ	5															5
	ネパール	15															15
	パキスタン				30												30
	スリランカ	15															15
	小計	49			60					16							125
太平洋	バブアニューギニア	15			15												30
	太平洋その他		21					24			15						60
	小計	15	21		15			24			15						90
アフリカ	英語圏	46										22					68
	仏語圏	49										24					73
	小計	95									46						141
中南米	メキシコ								2								2
	ブラジル																0
	ペルー								3								3
	チリ	2							1								3
	その他	15							24								39
	小計	17							30								47
サウジアラビア		20															20
中央アジア5カ国		20					20	20							20		80
コーカサス3カ国							15				15						30
アフガニスタン		20			15												
合計		479	211	0	256	23	0	213	76	140	67	84	18	0	38	20	1,625



表6. 平成15年度青年招へい事業 調査団派遣実績

	調査団名	派遣国	派遣団体（構成）	日程
1	日本・アフガニスタン友情計画実施協議調査団	アフガニスタン	独立行政法人国際協力機構 2名 財団法人国際協力センター 1名	2003.7.29 ~ 2003.8.7
2	青年招へい事業コーカサス地域計画打ち合わせ調査団	アゼルバイジャン、グルジア	独立行政法人国際協力機構 2名 財団法人国際協力センター 1名	2003.10.19 ~ 2003.10.26
3	東ティモール事後交流促進調査団	東ティモール	特定非営利法人沖縄平和協力センター 4名	2003.11.10 ~ 2003.11.17
4	タイ事後交流促進調査団	タイ	社団法人青少年育成国民会議 3名 財団法人仙台YMCA 7名	2003.12.6 ~ 2003.12.10

## 別添1. 青年招へい20周年記念式典報告

### 1. 開催目的

青年招へい事業の20周年を記念し、

- (1) 青年、市民より、本事業の成果・効果を確認すると共に助長する。
- (2) 本事業の20周年を記念をアピールし、事業成果の効果的な広報を行う。
- (3) 国内参加者のネットワーク、同窓会と国内参加者（市民及び団体）のネットワーク構築に資することを目的とする。

### 2. テーマ

青年招へいの未来へむけて

### 3. 実施日

平成16年2月27日（金）・28日（土）

### 4. 実施場所

国際協力総合研修所国際会議場

### 5. 主催

国際協力機構

「青年招へい事業」活動協力協議会

### 6. 参加者 274名

- (1) アセアン各国同窓会代表者 14名（ブルネイ不参加、シンガポール・カンボジア各1名、その他の国2名、ミャンマーは同窓会なし）
- (2) エッセイ&フォトコンテスト受賞者
  - アセアン受賞者 9名
  - 日本人受賞者 13名
  - ご家族 6名
- (3) 地方団体 22名
- (4) 受賞者のホストファミリー 13名
- (5) 在日の既招へい青年 14名
- (6) 都内団体 46名
- (7) CAC関連地方団体 31名
- (8) 合宿セミナー・ワンデイ・ボランティア・その他 66名
- (9) 国内機関 10名
- (10) 本部 14名
- (以下レセプションのみ)
- (11) 国会議員 3名
  - 海部俊樹衆議院議員
  - 鈴木淳司衆議院議員
  - 榛葉賀津也参議院議員

代理出席 3名

橋本龍太郎衆議院議員秘書 藤村健氏

高村正彦衆議院議員秘書 川野邦仁氏

加納時男参議院議員秘書 吉濱健二氏

(12) 在日大使館 10名

大使出席 カンボジア

参事官等出席 ベトナム、タイ、ラオス、フィリピン、ミャンマー、インドネシア

## 7. プログラム実施内容

第1日(司会 杉山佳寿子)

14:35(予定より5分遅れで開始)

ビデオ「青年招へい20周年の歩み」

14:40

主催者挨拶

緒方理事長より挨拶

14:45

表彰状授与

- ・緒方理事長より日本人のエッセイ部門およびフォト部門の最優秀賞、優秀賞の計3名(井上氏欠席)と海外の受賞者9名に表彰状授与

- ・「青年招へい事業」活動協力協議会 上村会長より日本人の地域交流賞受賞者10名(北村氏遅刻のため授与せず)

15:00

休憩(受賞者は写真撮影)

15:20

- ・研修業務課 南職員による受賞者への賞品の説明(パワーポイント使用)

- ・スリランカ、ラオス、カンボジア、タイにおいて協力隊員または専門家の指導の下、地域住民の所得向上を目的として住民自らが作製した手工芸品を贈呈

15:25

- ・海外からの受賞者及び、受賞者が当事業で来日したときのホストファミリーに司会者よりインタビューを行った。

- ・フォト部門の受賞写真をパワーポイントで映写し、受賞者より当時の思い出を語ってもらった。

- ・日本人の受賞者に司会者よりインタビューを行った。

16:00

合宿セミナー参加者と友人による三味線、日舞、和太鼓の演奏

16:30

終了

18:00

レセプション

- ・堀添CAC副会長より主催者挨拶

- ・海部元総理(CAC顧問)より挨拶

- ・鈴木淳司議員挨拶

- ・榛葉賀津也議員挨拶

- ・隅田理事乾杯発声

・中曽根元総理メッセージ紹介

第2日

10:00

アセアン同窓会の各国別発表

アセアン同窓会9カ国より、それぞれ実施している同窓会活動の報告を行った。

13:30

シンポジウム1

パネリスト 堀添勝身（進行役）

原雄一郎（合宿セミナー参加青年）

島津一久（地方受託団体）

纈纈和江（地方受託団体）

菊池加代子（都内受託団体）

大島泰樹（プログラムコーディネーター）

八巻あい子（JICE監理員）

日本在住既招へい青年（ベトナム）

事前に、会場にいる合宿セミナー、ワンデイ・ボランティアへの参加者、地方プログラム実施団体、日本在住の既参加青年等にアンケートを実施し、その回答も取り入れシンポジウムを実施した。

15:00

シンポジウム2

パネリスト 上村文三（進行役）

荒木光弥（国際開発ジャーナル社代表取締役主幹）

木全ミツ（元国連公使）

黒田一雄（早稲田大学アジア太平洋研究科助教授）

沼田幹男（外務省経済協力局技術協力課長）

湊芳郎（国内事業部長）

以上



## 別添2. 青年招へい事業 帰国青年同窓会活動概要 (平成15年度)

○会員数、帰国青年会員数は、基本的には平成15年度実行計画による。  
○活動については第16回AJAFA-21年次会議コントリビューション報告・平成15年度実行計画 (シンガポール、ブルネイからは提出なし) による。

国名	インドネシア	マレーシア	フィリピン	タイ	ベトナム	カンボジア	ラオス	ミャンマー	シンガポール	ブルネイ	
同窓会名称	KAPPIJAZI Keluarga Alumni Program Persahabatan Indonesia- Jepang Abad 21	PAMAJA Persatuan Alumni Program Persahabatan ASEAN-Jepun Abad Ke 21, Malaysia	PAJAF21 Philippines ASEAN-Japan Friendship Association for the 21st Century	FVAA The Friendship Youth Alumni Association of Thailand	VACVF Vietnam Alumni Club of Friendship Programme	JAAC The JICA Alumni Association of Cambodia	The Lao Alumni Youth Club for Friendship Programme	MAJA Myanmar Association of Japan Alumni ★技術研修員との合同組織	SAJAF21 ASEAN-Japan Friendship Association for the 21st Century, Singapore	PERTAB21 Perubuhan Alumni Abad K-21, Brunei Darussalam	
設立年月	1985年3月	1986年1月	1985年12月	1990年11月	2000年3月	2001年1月	2002年6月	2003年3月	1986年2月	1988年12月	
会長・President (職業等)	Mr. Muhammad Iqbal Latief (editor and publisher)	Mr. Abdul Rahman Bin Abdul Razak (assistant manager (IT)/webmaster)	Ms. Evangelina G. Lawas Head Social Worker of the Rehabilitation Sheltered Workshop of the Dept. of Social Welfare and Development	Mr. Pratuang Wiroonpetch (Lecturer at Silpakorn University, Faculty of Arcaeology)	Mr. Tran Duc Loi (Secretary General of the Vietnam Union of Friendship Organization)	Mr. Theng Pagnathun (Deputy Director, k Ministry of Planning Cambodia)	Mr. Khamphing SENGTANALATH (Deputy Chief of Cabinet)	Mr. Christopher Chan Keng Tong	Mr. Haritel bin Haji Simpul		
連絡先	Graha Pemuda, 2nd Floor Jl. Gerbang Pemuda No.3, Senayan, Jakarta 10270, Indonesia TEL: 62-21-57009321	Unit Look East Policy, PSD Malaysia, P.O. Box 13908, 50796 Kuala Lumpur, Malaysia TEL: 60-19-2604731 psm@alumni.mva.gov.my	2358 Singalong, Matate, Manila, Philippines 1004	PO Box 16 Nuepralarn Post, Office, Pranakorn Bangkok 10202, Thailand TEL: 66-1-343-3831	64 Ba Trieu, Hanoi, Vietnam	TEL: 855-12-899313 FAX: 855-23-218895	Phonethan Road, P.O. Box 736 21-951056 TEL&FAX: 856-21-417108				
メールアドレス					cydec@h.vnn.vn						
会員数	3093	2120	2800	1450	810	270	203	203	1,822	126	
帰国青年数	3093	2120	2800	2650	810	270	203	203	2190	660	
帰国青年会員数	3093	2800	2800	1450	810	270	203	203	1785	20	
入会率	100%	76.00%	100%	54.70%	100%	100.00%	100.00%	100.00%	86%	3.20%	
平成14年度の 主な活動実績	・年次総会 ・地方支部別会議 ・帰国青年名簿作成	・年次総会、中更新 ・PAMAJAマガジンを販売	・執行委員定例会議 ・広報誌作成 ・帰国青年名簿作成	・月例会議 ・年次会議 ・ニューズレター発行	・年次総会 ・地方支部別会議 ・帰国青年名簿作成 ・帰国誌作成	・年次総会 ・帰国誌作成	・年次総会 ・広報誌作成 (脚別) ・広報誌作成 ・帰国青年名簿作成			・銀行委員会	
国内事業	・社会貢献活動 (医療支援 プログラム等、地方自治体 と協力) ・各種地域セミナー開催 ・エッセイコンテスト実施 (日本大使館から委託)	・Look East Policy 20周 年国際会議協力 (シンガポ ラ、日本、アセアン加盟 各国イベント主催と参加 在マの日本人子弟ホーム ステイをアレンジ)	・医療支援プログラム (各 種セミナー開催、地方紙で は裏子提供部隊と協力して 住民に医療ケアを普及) ・楳嶺プロジェクト	・楳嶺学級キャンプ実施 ・社会貢献活動 (動物ボラ ンティア、環境保護活動)	・日本経済新聞購読 ・日本文化紹介 (生け花、 合気道、折り紙教室) ・自衛隊30周年記念エッセイ コンテスト実施 (日本大使 館から委託)	・同窓会パーティーをアレ ンジ	・スポーツコンテストの開 催 ・スピーチコンテストの開 催 ・アルバム作り (青沼事務 紹介)			・青年招へい基礎コース 参加 (2名)	
アセアン域内交流事業	・ AJAFA-21年次会議出席 ・ マレーシア交流団を要人	・ AJAFA-21年次会議出席 ・ タイへ交流団派遣	・ AJAFA-21年次会議開催 会出席	・ AJAFA-21年次会議開催	・ AJAFA-21年次会議出席	・ AJAFA-21年次会議出席	・ AJAFA-21年次会議出席		・ AJAFA-21年次会議出 席	・ AJAFA-21年次会議出 席	
日本との交流事業	・ 青森08インドネシア国会 議員の再交流団来日 (H14) ・ 青森08マスコミ関係者の 再交流団来日 (H15)	・ マレーシアの学生を日本 国内6県へ派遣 ・ 若手の学生を要人 ・ 日本遊学団開催	・ 北海道に再交流団派遣	・ 日本青年ホームスタイヤ 入	・ 都内団体再交流団受入 ・ 富山、鳥取の再交流団受 入	・ 北海道団体へ機関紙送付			・ 宮崎との交流 (再交流 団派遣受入) ・ 千葉市に再交流団派遣	・ 2000年フォーラム出席	
JICA事業支援	・ 現プロ協力 ・ JICAニューズレター編集 協力 ・ NGOジャパンデスカ事務 助産支援協力 ・ 日本・アセアン交流年イ ベント協力	・ 現プロ協力	・ 現プロ協力	・ 現プロ協力 ・ 事後交流促進団受入 ・ リソニスバニシリスタ の作成 (タイ籍)	・ 現プロ協力 ・ 現プロ協力 ・ エッセイコンテスト受賞 者の謝辞旅行協力	・ 現プロ協力					

## 別添3. 平成15年度事後交流調査団派遣報告(要旨)

### 1. 東ティモール

(1) 派遣団体：特定非営利法人 沖縄平和協力センター

(2) 派遣期間：2003年11月10日(月)～11月17日(月)

(3) 調査結果概要：

- ① 東ティモールの復興の現状と課題について、関係省庁、国際機関、NGO、地方視察等により、詳しく観察及び考察を行い、今後の協力の基盤となる情報を蓄積した。
- ② 帰国青年聞き取り調査等により、沖縄訪問は復興を考える有意義な機会であったことが確認された。
- ③ 今後本調査団の成果を基に、草の根技術協力の案件形成中。

### 2. タイ

(1) 派遣団体：社団法人青少年育成国民会議

財団法人仙台YMCA

(2) 派遣期間：2003年12月6日(土)～12月10日(水)

(3) 調査結果概要：

- ① 同窓会、タイ国内NGOとの協議を行い、今後の連携の強化について合意し、事業連携案を作成した。(相互交流事業、貧困・エイズプロジェクトにかかる協力等)
- ② 帰国青年及び窓口機関での聞き取り調査により、青年招へい事業が特に個人の成長とネットワークの面で大きな成果をもたらしていることが確認された。

以上

---

青年招へい事業〈実績概要・交流レポート〉

平成16年8月

発行 独立行政法人国際協力機構国内事業部市民参加協力室青年招へいチーム  
〒151-8558 東京都渋谷区代々木2-1-1 新宿マインズタワー  
電話 03-5352-5401～3

編集 (財)日本国際協力センター国際交流部  
〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-10-1 日土地西新宿ビル  
電話 03-5322-2571

---

無断転載を禁じます。



